

ゲダ 5 世に見る中国共産党のチベット政策と統一戦線活動

川田 進

知的財産学部 知的財産学科
(2007年5月31日受理)

Discussion of the Policies of the Chinese Communist Party
on Tibet and its United Front Activities through the Role of the 5th Geda
by
KAWATA Susumu

Department of Intellectual Property, Faculty of Intellectual Property
(Manuscript received May 31, 2007)

Abstract

The 5th Geda (格達 5 世) is one of the highest priests of Tibetan Buddhism. He is considered to be a heroic religious leader who supported the Chinese Communist Party in the Red Army's Long March and the Tibetan Revolution. The 5th Geda is associated with the Chinese Communist Party in the following two ways: his support for the Red Army and Zhu De (朱德) in 1936; and his role as a messenger of the party during the liberation of Tibet by the party in 1950. The purpose of this paper is to shed light on the united front activities of the Chinese Communist Party centered on its policies on Tibet through analyzing the political figure of the 5th Geda.

キーワード: ゲダ 5 世 (格達 5 世), ゲダ 6 世 (格達 6 世), 朱徳, 甘孜チベット族自治州, 白利寺,
ロバート・フォード, 『チベットに囚われて』, 中国共産党, 統一戦線工作部

Keyword: 5th Geda, 6th Geda, Zhu De, Garze Tibetan Autonomous Prefecture, Baili Temple, Robert Ford,
Captured in Tibet, Chinese Communist Party, United Front Work Department of CCPCC

1.はじめに

1.1 問題の所在

ゲダ5世はチベット仏教ゲルク派の高僧である。1903年、現在の中国四川省甘孜県白利郷徳西底村に生まれ、幼くして白利寺(甘孜県生康村)の転生ラマに認定された。そして1950年、現在のチベット自治区チャムド(昌都)で圓寂した。ゲダ5世は白利寺の座主であり、ガンデン寺(チベット自治区ラサ)でゲシェ(チベット仏教学博士に相当)の学位を取得したが、宗教指導者としてチベット仏教史に残した足跡は極めて小さいと言わざるを得ない。

一方、紅軍長征史やチベット革命史においては、中国共産党を援護した「英雄的」宗教者としての功績がしっかりと刻まれている。筆者はゲダ5世と中国共産党を結ぶ接点は二つあると考えている。一つは長征時期における紅軍と朱徳への支援(1936年)、もう一つは中国共産党のチベット解放時期における党の使者としての役割である(1950年)。そのことはゲダ5世に関する各種評伝のタイトルや冒頭の記述を見れば明かである。

「紅軍総司令の摯友」

(『四川少数民族紅軍伝』)¹⁾

「紅軍長征的積極支持者」

(『長征事典』)²⁾

「西康白利寺活仏」

「著名愛国進歩人士」

「西藏和平解放的献身者」

(『歴代藏族名人伝』)³⁾

ゲダ5世の死後、中国共産党は政治的意図をもって「愛国活仏」「中華民族の英雄」として彼をよみがえらせた。本稿は死後に形作られたゲダ5世像の分析を通して、チベット政策を中心とした中国共産党の統一戦線活動の一端を明らかにすることを目的とする。

用いる資料は中華人民共和国建国後に発行された

漢語による諸文献やルポルタージュ、テレビドラマ「格達活仏」「西藏風雲」、ゲダの死に関与したと言われているイギリス人無線技師ロバート・フォードの回顧録等である。ゲダ5世と中国共産党の関係には不明確な要素も多く、文献や映像資料のみに依拠した分析には限界がある。そこで、筆者が行った四川省甘孜県における現地調査の結果を踏まえることで考察の補助とする。調査項目は「朱徳総司令和格達五世紀念館」調査(2003年)、ゲダ6世自宅訪問及びインタビュー(2005年)である。

筆者はこれまでゲダ活仏に関する拙文を二篇発表している(「活仏と共産党を結ぶ『紅い』絆 - 格達五世と朱徳」「電視劇『格達活仏』に見る虚々実々の英雄像 - 白利寺ゲダ五世の死と再生」)⁴⁾。本稿は論の展開及び説明の都合上、前二稿を統一戦線活動の視点から再構成した上で新出資料に基づき大幅に加筆しているため、記述内容に重複する箇所があることを断っておく。また、前稿同様、中国共産党が宣伝するゲダ5世の「英雄」像を追認することを目的としていない。本稿ではチベット音の不明な人名と地名は漢語表記のまま残した。

1.2 先行研究

中華人民共和国においてゲダ5世は、革命に尽力した愛国的宗教指導者、つまり中国共産党と中華民族の英雄と見なされている。建国後に公表されたゲダ5世に関する各種資料は、すべて中国共産党が作成したものであり、活仏の従者や縁者によるものはない。現在中国では党の主張に沿ったゲダ5世像を紹介することは可能であるが、批判や反論を目的とした論文を公表することは極めて難しい。したがってゲダ5世は党の民族政策・チベット政策や統一戦線活動といった分野では学術研究の対象と成り得るが、党が定めた政治の枠から逸脱して自由な議論と研究を行うことは許されていない。チベット仏教学においては、ゲダ5世が著した仏教理論に関する文献が確認されていないため、学術研究の対象と見な

されていない。

日本での先行研究には、阿部治平著『もうひとつのチベット現代史 - - プンツォク=ワンギェルの夢と革命の生涯』(明石書店, 2006年)があり, 第3章でゲダの死とフォードの関係に触れている。その他には, 1977年にチベット自治区のラサを訪問した秋岡家栄氏と島田政雄氏が, それぞれ著書『チベットの旅』(佼成出版社, 1977年), 『チベット - - その歴史と現代』(三省堂, 1978年)の中でゲダ5世の英雄譚とその死について紹介している。

欧米の研究では, A・トム・グルンフェルドの著書*THE MAKING OF MODERN TIBET*(漢語版『現代西藏の誕生』中国蔵学出版社, 1990年, 日本語版『現代チベットの歩み』東方書店, 1994年)に, ゲダの死とフォードに関する記述がある。欧米の他の先行研究の有無については, 現在も調査を継続中である。各研究の詳細な内容については後述する。

1.3 「トゥルク」「活佛」「活仏」

ゲダとはチベット仏教ゲルク派に属する転生ラマの名跡である⁵⁾。転生とは, 徳の高い僧侶(ラマ)が死後幼児に意識を転移させることで名跡を継がせ, 衆生を救済し続ける制度であり, カルマ派が確立した後ゲルク派にも伝わった。転生ラマの一人であるゲダ5世は, 漢語では一般に「格達活佛」(Geda huofu)とか「格達仁波切」(Geda renboqie), 「格達喇嘛」(Geda lama)と表記されている。転生ラマをチベット語では「トゥルク」と言い, 漢語では一般に「活佛」(huofu)と表現している。「トゥルク」と「活佛」は同義ではなく, 漢語の「活佛」には政治的意味合いが込められている場合が多い。パンチェン・ラマ10世の転生ラマ認定をめぐる政治的混乱(1995年)を見てもわかるように, 中国共産党は中国領土内における転生ラマの認定に介入することで, チベット仏教への統制を強めている。転生ラマの制度自体はチベット仏教のものであるが, 転生者搜索の許可と認定は中国共産党が行っている。従って漢

語の「活佛」には, 「中国共産党が認定したトゥルク」という政治的意味合いも色濃く見られる。本稿では「ゲダ5世」「ゲダ活仏」という呼称を用いるが, 「ゲダ5世」は「ゲダ6世」と区別するためである。本稿は中国共産党の統一戦線活動の視点からゲダ活仏を論じるため, 「トゥルク」ではなく「活仏」という用語を使用する。

2. ゲダ5世の生涯

2.1 各種評伝

ゲダ5世の評伝は多数存在するが, 本稿で重要視するのは以下の8篇である。

- (1) 来作中「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」(資料提供者: 鄧珠拉姆・于在濱・阿都澤呷), 中国人民政治協商会議四川省甘孜藏族自治州委員会編『四川省甘孜藏族自治州文史資料選輯』第2輯, 1984年6月, 11 - 18頁。
 - (2) 周錫銀「為西藏和平解放而献身的格達活仏」『西藏研究』1984年第3期, 18 - 23頁。
 - (3) 「格達」, 曾国慶・郭衛平編著『歴代藏族名人伝』西藏人民出版社, 1996年, 359 - 366頁。
 - (4) 周錫銀「格達活仏」, 藍宇翔・周錫銀主編『四川少数民族紅軍伝』四川人民出版社, 1996年, 281 - 291頁。
 - (5) 「格達活仏」甘孜県志編纂委員会『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 436 - 438頁。
 - (6) 鄧珠拉姆(文), 朗加・馬曉峰(画)『格達活仏』四川民族出版社, 1999年。
 - (7) 劉延東「功烈永垂民族史 - - 紀念五世格達活仏誕辰100周年」『中国西藏』2004年第2期, 2 - 3頁。
 - (8) 張芳輝『格達活仏』西藏人民出版社, 2005年。
- (6)は小学生への愛国主義教育を目的とした画集である。(7)の劉延東は党中央統戦部長であり, 2007年現在中国政府が提供した最新の資料である。(8)はテレビドラマ「格達活仏」のシナリオの材源となった小説である。一部フィクションも加えられている

が、概ね中国共産党が主張する事実に則した政治小説である。8篇に共通する点は、中国共産党への貢献に記述の重点が置かれていることである。

この中で筆者が最も注目する資料は(1)である。本文の執筆は来作中であるが、ゲダ5世の生い立ちや紅軍との関係等の資料を調査した中心人物はチベット人学者テンドゥ・ラモ(鄧珠拉姆)である。現在広く流布しているゲダ5世の評伝の骨格は、後述する「1950年12月3日新華社電ニュース」及びテンドゥ・ラモ(鄧珠拉姆)の調査に基づいている。

2.2 47年の生涯

ゲダ5世の生年は資料(1)のみ1902年としているが、(7)を含む他の資料はすべて1903年となっているため、本稿では生年を1903年とする。ゲダ5世の47年間の生涯は大きく三つの時期に分けることができる。

(1)誕生から33歳頃までの時期

(2)紅軍長征時期、朱徳との出会い

(3)チベット解放時期、党の使者、圓寂

以下にその生涯の概略を示す。転生ラマと認定された年齢等については各資料に異同があることを断っておく。

清朝末期にあたる1903年、甘孜のあるチベット人農奴の家(現在の四川省甘孜県徳西底村)に更呷益登という男子が誕生した。当時この地域を支配していたのは白利土司であった(土司とは清朝政府の承認の下、支配地の行政権をもつ有力者)。幼くして父を亡くした彼は、2歳で村の寺院に預けられ、7歳で白利寺の転生ラマに選ばれゲダ5世となった。幼いゲダ5世には優秀な家庭教師がつけられ、英才教育が施されていった。17歳でラサにあるゲルク派の総本山ガンデン(甘丹)寺の門をたたき、教義のみならず医学、暦学、文学など多方面の学問を熱心に修めた。厳しい修行が実を結び、25歳で最高学位ゲシェを取得した後、白利寺へ戻った。チベット医学の知識をいかして病人を救い、孤児や老人を寺で養っ

た。少年への識字教育にも力を注ぎ、土木や建築の技術指導も率先して買って出た。ゲダは「慈悲の活仏」として多くの信徒から尊敬を集め、白利寺の支持基盤を強めていった。

1936年3月末、長征途上の中国工農紅軍第四方面軍が甘孜(カンゼ)に到着した。疲弊した部隊は北上に備えて食糧や燃料の確保に奔走するとともに、中国共産党の宗教政策・民族政策の宣伝活動を行った。ゲダ活仏は部隊を率いる朱徳の人柄と共産党の政策に賛同し、紅軍への食糧支援を惜しまなかった。そして共産党の指導の下に設立された中華ソビエトバ政府の指導者にも選ばれた。朱徳は「10年か15年後に、紅軍は再び戻ってくる」と言い残して甘孜を離れた。

1950年、毛沢東はチベット解放を目指し、解放軍をラサへ進攻させた。チベット政府への説得工作に難航した党中央は、朱徳と親交のあったゲダ活仏を党の使者としてラサへ向かわせた。途中チャムド(昌都)の町に到着した際、チベット政府はゲダを軟禁し、イギリス人無線技師フォードと結託して殺害した。

ゲダ活仏と中国共産党との関係(紅軍とチベット解放)、及びゲダの死をめぐる謎については、統一戦線活動と関連付けながら次章以降で詳しく扱うこととする。

3. 朱徳と紅軍への支援

3.1 紅軍甘孜到着

『甘孜県志』によると、第四方面軍紅三十軍が甘孜(カンゼ)に到着したのは1936年3月31日であった⁶⁾。その時甘孜にいた諾那活仏(国民党が派遣した西康宣慰使)は、28日に炉霍(タンゴ)を発った紅三十軍に向かって武力攻撃を企てたが失敗に終わった⁷⁾。

紅軍が甘孜に到着すると、町はひっそりと静まりかえり人影はまばらであった。このあたり一帯は、住人の大多数がチベット人の農民であった。国民党は「共産党が金品や食糧を奪いに来た」「抵抗すれ

ば殺される」という噂を流し、農民たちに恐怖感を植え付けた。そして、国民党と組み反共活動を行った諾那活仏は、「紅い魔物がやって来て、災いが降りかかる。山中に身を隠しさえすれば神仏の加護が得られ、災いから逃れ安泰でいられる」と農民たちを諭した⁸⁾。カム(東チベット)で大きな影響力をもつ諾那活仏の言葉を疑う者はいなかった。ゲダ活仏も当初その言葉を信じて山にこもった⁹⁾。

第四方面軍を率いる朱徳はこう考えていた。しばらく甘孜に留まり、雲南から北へ移動中の紅二軍・紅六軍と合流した後、毛沢東のいる陝西省北部を目指して北上する。その間を利用して疲弊した兵士を休ませ、北上に反対するもう一人のリーダー張国燾(1897 - 1979)を説得し、部隊の立て直しをはかる。そして当面の食糧と燃料・生活物資を調達し出発に備える。

ところが、人の気配がない町や村を見て朱徳は大いに困惑した。毛児蓋(現在の四川省松潘県)で毛沢東と別れた後の厳しい行軍で、兵士の数は半減したとはいえ約4万人の大部隊を抱えていたからである。先ず食糧の確保が急務であり、現地のチベット人の協力なくして、大部隊を維持することは不可能であった。山中に逃げ込んだチベット人を説得し町や村に連れ戻すには、彼らが尊敬してやまないゲダ活仏の力を借りるのが得策であった。

3.2 紅軍の宣伝活動

1935年に毛沢東は「論反対日本帝国主義的策略」(1935年12月27日)の中で、長征の役割と意義を次のように表現した¹⁰⁾。

長征について言えば、どのような意義があるのだろうか。我々は言う、長征は歴史の記録にあらわれた最初のものである、長征は宣言書であり、長征は宣伝隊であり、長征は種まき機であると。

食糧の確保なくして行軍は不可能である。チベット人から食糧を譲り受けるには、その土地を支配す

る土司や活仏への働きかけが何より大事であった。当時、第四方面軍はチベット人地区でさまざまなスローガン用いて、住民の信頼を勝ち得ようと努力した¹¹⁾。

紅軍はチベット人の旧友だ！

紅軍はチベット人の独立を助ける！

紅軍はチベット人の生命と財産を守る！

紅軍は仏教寺院を保護する！

紅軍は売買をごまかさない！

チベット人は紅軍とともに抗日反蔣に取り組もう！

紅軍は異民族であるチベット人に対して、共産党の宗教政策や民族政策の宣伝活動にとりかかった¹²⁾。風俗習慣の尊重、信仰の自由、寺院の保護、民族の平等など、共産党が掲げる理念をさまざまな方法で訴えた。第四方面軍総政治部は、各民族居住区によりスローガンを使い分けるよう指示を出した。日本軍の脅威を身近に感じることがない甘孜のようなチベット人地区では、「抗日」を呼びかけるスローガンは少なかった。各部隊には「粉筆隊」が組織され、漢語に通じたチベット人が雇い入れられた。彼らは民家の土塀にチベット語でスローガンを書き連ね、文字を解する有力者にメッセージを送った¹³⁾。

兵士は銅鑼を打ち鳴らしながらスローガンを連呼し、歌を歌い劇を演じて町や村をねり歩いた。漢語の四川方言を交えるなどの工夫も凝らした。「一路長征一路歌」¹⁴⁾という言葉が示すように、紅軍にとって歌や劇は兵士の娯楽であるとともに、共産党の政治宣伝を支える重要な武器であった。

その外にも「鑽花隊」(「花」は「図案や模様」、「鑽」は「石に刻む」の意)と呼ばれる兵士や地元で雇われた石工が、人目につきやすい岩に政治スローガンを刻み込んだ。チベットには岩肌や石に真言や経文・仏像の図を彫り込むことで、徳を積み祈りを捧げる習慣があることを意識した作戦であった。板や竹にもスローガンを書き、桐の油を塗ったあと川に流した。これは「水電報」と呼ばれた作戦である¹⁵⁾。

宣伝の対象は現地のチベット人だけにとどまらず、敵対する国民党兵士や紅軍内の兵士にも及んでいった。医療や衛生知識に関する啓蒙的な内容も含まれていた。また、紅軍内部にはチベット人兵士や文字を読めない農民兵と少年兵、北上政策に反対する張国燾グループなどを抱えていたため、自軍兵士への宣伝や広報活動といった役割も有していた。

甘孜はチベットと四川を結ぶ茶馬街道の中継地であり、人・物・金・情報が頻繁に行き交っていた。そのため漢語を解するチベット人やチベット語を解する漢人が少なからずいた。こうした隊商の耳や目を通じて、共産党の民族宗教政策や国民党による反共スローガンが各地へ運ばれていったのである。

東チベット一帯はダライ・ラマが支配した中央チベットと異なり、漢人に対するアレルギーの弱い地域であった。紅軍の宣伝に啓蒙を受けたり、貧困に耐えかねて長征に加わるチベット人もいた。1935年、馬爾康(マルカム、現在の四川省アバ州州都)で紅軍に入ったサンギェ・イエシェ(桑吉悦希、天宝)という18歳のチベット人青年もその一人であった。彼は後にゲダ活仏の運命を大きく左右することとなった¹⁶⁾。

3.3 ゲダ活仏と朱徳

朱徳は広範な宣伝活動を行う一方で、甘孜の地主と農民の心をつかむには高僧の力を利用するのが一番の近道だと考えていた。甘孜一帯で影響力を持つ高僧の一人が白利寺のゲダ活仏であった。ゲダも諾那活仏の言葉を信じて、農民とともに山中に潜んでいた。活仏を説得するための方策として、朱徳は共産党の考えを部隊の具体的な行動で示した。「当地の風俗習慣を尊重せよ」「チベット人の所有物は一草一木に至るまで守り抜け」「チベット人が留守の間、勝手に家屋に入るな」「彼らが残した家畜に餌を与えしっかり面倒を見る」といった指示を出し、紅軍の姿勢と方針が活仏に伝わるのを待った¹⁷⁾。

ゲダ活仏が共産党の政策に理解を示し寺に戻る

と、農民たちの疑心暗鬼も消え次々と山を下りて村へ帰っていった。こうして紅軍の宣伝活動が徐々に実を結びはじめると、朱徳は仏教寺院と協力関係を築くことに力を注いだ。1936年4月12日、紅軍と甘孜寺・白利寺は「互助条約」(図1)を締結するに至った(「中国紅軍総政治部甘孜喇嘛寺白利喇嘛寺互助条約」)。この時、紅軍側で中心となったのは張国燾派の陳昌浩(紅軍総政治部主任)であった。「条約」の主旨は紅軍がチベット人自治政府の成立を助け、寺院が紅軍への食糧援助を行う、そして互いに「興蕃滅蔣」政策に協力することであった。「条約」の現物は、1985年に活仏の遺品である枕の中から発見されたと言われている¹⁸⁾。



図1 紅軍が甘孜寺・白利寺と交わした互助条約

Fig.1 The mutual aid treaty concluded by the Red Army with Ganzi Temple and Baili Temple

ゲダ活仏が紅軍への食糧援助に前向きであることを知った朱徳は、甘孜の町から西へ十数キロはなれた白利寺を訪ねた。活仏は朱徳を歓待し、紅軍への支援を約束した。『甘孜県志』には麦134石(1石は100リットルに相当)、豌豆22石、馬15頭、牛19頭と記されている¹⁹⁾。さらに通訳や案内役の紹介も積極的に行った。活仏の呼びかけに近隣の寺院や農民も応え、食糧や物資の調達を助けた。朱徳はその後、劉伯承を伴って何度も白利寺へ出向き、寺と町で計9回活仏と面談したと伝えられている²⁰⁾。続いて4月22日には、甘孜と隣接する徳格(デルゲ)の土司と相

互不可侵の協定を結び食糧支援を受けた。紅軍は返礼として武器や弾薬を贈った²¹⁾。

朱徳自身も食糧確保に向けて積極的に行動した²²⁾。紅三十軍は何長工や李先念等幹部が「糧食委員会」を組織して、牛や羊の乾し肉の備蓄に励むよう号令をかけた。朱徳は自ら「野菜委員会」を作り、老農や薬草に通じた僧侶の協力を得て、食用となる野草の識別と採集に同行した。そして「吃野菜須知」という冊子を作成し、各部隊に配布した。紅二軍・紅六軍の合流を待つ間、農民から羊毛を買い入れ、農民兵は総力をあげて糸を紡ぎ防寒着を編んだ。

ただし、兵士たちの自助努力には限界があった。3000メートルを越す高原の土地は痩せており、食料の確保は困難を極めた。朱徳が高僧や土司との統一戦線に積極的に動いた理由は、何よりも部隊の食糧問題を解決するためであった。

3.4 ゲダ活仏とボバ政府

先に触れたように、「中国紅軍総政治部甘孜喇嘛寺白利喇嘛寺互助条約」には、紅軍がチベット人自治政府の成立を援助することが約束されている。甘孜県にボバ政府が成立したのは1936年4月15日、紅軍が甘孜に到着して半月ほど過ぎた頃であった²³⁾。ボバ(漢語表記は「波巴」あるいは「博巴」とはチベット語Botの音訳であり、「チベット人自身」を意味している。つまり、国民党や軍閥の支配から脱却したチベット人による自治政府組織が紅軍の支援で誕生したのである。政府機関は土司の麻書大樓に置かれ、70名余りのチベット人青年による騎兵隊も創設された²⁴⁾。甘孜県ボバ政府の指導者の中で、名前が確認できる者を以下に示す²⁵⁾。

(1)主席：達吉

(2)副主席：格達活仏、達娃洛仁

(3)委員：夏比洛、拉賓瑪、日嘎、扎洛、扎西彭措

当時のチベット社会では、高僧は宗教のみならず政治や経済活動にも強い権限と影響力を持っていたことを考えれば、ゲダ活仏が副主席の一人に任命さ

れたことに不自然さはない。しかし、このとき紅軍はゲダ活仏とボバ政府に二つの役割を期待していた。一つは紅軍への食糧支援、もう一つは農村の青年たちに紅軍への入隊を促すことであった。そのことは『甘孜県志』にも記載されている²⁶⁾。ボバ政府に騎兵隊が創設された背景には、紅軍への入隊を促すという意図もあったのである。騎兵隊を指揮したのは副主席の達娃洛仁であったが、紅軍の幹部が全面的に指導にあたった²⁷⁾。

ボバ政府は近隣の炉霍(ダンゴ)県や道孚(タウ)県にも成立し、各県のボバ政府の統合に向けた準備段階として、4月下旬に臨時ボバ中央政府が組織された。準備委員会の委員長には孔薩土司の徳欽翁姆、副委員長には白利土司の貢布汪登、秘書長には甘孜寺の香根活仏が選ばれた²⁸⁾。

そして5月1日、徳格(デルゲ)・白玉(ペユル)等16県の代表約700人が甘孜に集い、ボバ人民共和国第1回代表大会が開かれ、建国が宣言された。大会で中央政府の指導者が選ばれ承認された。主席には多徳(徳格)、副主席には達結(甘孜)と孔撒(甘孜)が選任された。採択された「大会宣言」の中に次のような記述がある²⁹⁾。

大会は中国抗日紅軍の誠意を大いに歓迎し、紅軍と永遠の同盟を結ぶことを決定した。そしてボバ人民の独立を支援し共鳴するすべての国家・民族・政府・軍隊は、ボバ人民の朋友であることを宣言し、友誼の関係を結ばねばならない。

ボバ政府はチベット人自身が血と汗を流して打ち立てたものではなく、紅軍がにわかにお膳立てしたものである。従って「大会宣言」にも「政治綱領」にも反国民党・反蒋介石という紅軍側の事情が色濃く反映されている。綱領の第1条には「漢人官僚・国民党・蒋介石を役所・役人から追放しよう」とある。その他、土地の没収と分配(第2条)、選挙の実施(第4条)、各民族の政治参加(第5条)、自衛軍の設

立(第6条), 信教の自由とチベット仏教の保護(第7条), 商工業の発展(第8条), 農業の改良(第9条)等が謳われている³⁰⁾。これらは中国共産党が掲げていた民族政策・宗教政策を軸に, 第四方面軍がチベット人社会の現状を調査した上で作成したものである。その調査報告は総政治部による「中国工農紅軍第四方面軍総政治部対番民的策略路線的提綱(供党小組討論用)」(1936年5月29日)であり, 生活習慣・歴史沿革・社会制度・宗教・冠婚葬祭・土地問題など多岐にわたっていた³¹⁾。

3.5 張国燾とボバ政府

この政治劇の脚本を書いたのは張国燾であった。彼はボバ政府成立から約1年前の1935年5月, 中華ソビエト共和国西北連邦政府を組織し, 少数民族政権を連邦内に加える構想を練っていた。「中華蘇維埃共和国西北聯邦政府成立宣言」(1935年5月30日)には, 次のように書かれており, 反国民党・反蒋介石と民族自決を前面に打ち出し, 後のボバ政府綱領の各項目を先取りした内容となっている³²⁾。

ソビエト西北連邦政府は, 帝国主義・国民党蒋介石・劉湘・鄧錫侯・胡宗南による回・番・蒙・蔵・苗・夷など少数民族に対する抑圧政策に断固反対し, 民族自決を行い, 回・番・蒙・蔵・苗・夷各民族の独立を支援する。各民族は自らの政府を組織する権利を有し, 各民族自らの意志に基づき団結し, 国賊である蒋介石と帝国主義を我らと共に打ち倒そう。

南下して連邦政府の樹立を主張していた張国燾の案は, 毛児蓋会議(1935年8月20日, 中国共産党中央政治局会議)で毛沢東の同意を得ることはできなかった。会議では「中共中央政治局關於目前戰略方針之補充決定」が採択され, 「川陝甘の赤化を実現し, ソビエト中国のための強固な基礎を築く」ことを決定した³³⁾。つまり, 紅軍を南下させるのではなく

西北に移動させ, 少数民族の力を政権にいかした新たな根拠地を建設することが確認されたのである。

しかし, 張国燾は毛沢東の北上政策と袂を分かち配下の軍を引き連れて南下に転じた。そして1935年10月5日, 四川省の卓木礪(現在の四川省馬爾康県脚木足)で北上政策を批判し, 「第二中央」の樹立を宣言した(卓木礪会議)。その後, 四川各地で国民党の抵抗にあい苦戦を強いられた末, 1936年3月末に甘孜にたどりついた。張国燾はその直後の会議で, ボバ政府と連合政府構想の関係について語った(「中華蘇維埃運動發展的前途和我們当前任務」1936年4月1日)³⁴⁾。

道孚・炉霍・甘孜一帯で, 我々はボバ革命政府を打ち立てねばならない。これらは連邦政府の一部となるものだ。

朱徳は第四方面軍で張国燾の南下政策に従いながらも, 「第二中央」樹立には批判的であった。甘孜到着後, 朱徳は肖克・王震率いる紅六軍と賀龍・任弼時率いる紅二軍との合流を待ち, 部隊の食糧問題を解決した後, 陝西省北部に向かって北上する構えでいた。一方, 張国燾は四川を中心に西北連邦政府を作ることを目指していた。二人の行動計画は異なっていたが, 各自が当面の問題を解決しチベット人を束ねるにはゲダ活仏の協力が必要不可欠であるという思惑は一致していた。

甘孜寺・白利寺との「互助条約」に基づき, 朱徳は北上に備えて更なる食糧支援を要請し, ゲダ活仏は先頭に立って奔走した。その結果, ゲダ活仏が準備したものも含めて甘孜県全体で食糧120万斤(600トン), 牛200頭が紅軍に売却された³⁵⁾。一方張国燾は, ゲダ活仏や甘孜寺の香根活仏の協力を得てボバ人民共和国の成立を宣言し, 反国民党と民族自決を旗印に連邦政府構想の準備を着々と進め, 第四方面軍内での勢力拡大を狙っていた。ゲダ活仏は両勢力が甘孜でせめぎあうなか, 食糧支援と甘孜県ボバ政

府副主席就任という両者の統一戦線活動に巧みに利用されたのである。「互助条約」もボバ政府も結局は紅軍による紅軍のためのものであった。

その後、両者の確執はこのような結末を迎えた。6月22日に紅六軍が、30日に紅二軍が甘孜に到着すると朱徳は安堵した³⁶⁾。7月2日、朱徳は祝賀大会を開き、紅二軍・六軍・三十二軍を第二方面軍に再編し、北上政策を推進することを宣言した。2日の午後、孔薩大樓で幹部会議が開かれ、朱徳・賀龍・任弼時等がこぞって張国燾の分裂行動を批判し、北上に一致協力することを確認した(甘孜会議)³⁷⁾。その後、張国燾は北上の途中で別行動(西路軍)をとり新疆を目指したが、行動は失敗に終わり党内の軍事基盤を失ってしまった。

7月14日、準備が整った紅軍はようやく甘孜を出発し、9月末には最後の部隊が離れた³⁸⁾。朱徳はゲダ活仏との別れを惜しみ、愛用の軍帽と双眼鏡を贈り、紅軍は必ず甘孜に戻って来ると誓った。紅軍が去った直後、国民党がボバ政府の関係者や紅軍に協力したチベット人を襲撃するという事件が相次ぎ、チベット人自治政府はまたたくまに崩壊した。

ゲダ活仏は朱徳との約束を守り、白利寺で傷ついた紅軍兵士の介護にあたっていた。国民党の反撃が始まると、兵士に僧衣をまとい安全な場所へと搬送した。活仏の指示を受け、僧侶は随所で見張りに立ち二千から三千名にも及び傷病兵を守った。

3.6 ボバ政府と民族政策

先に見た「波巴第一次全国人民代表大会宣言(摘録)」(1936年5月)には、「ボバ人民共和国」が建国されたと記されている。中国の文献で「ボバ人民共和国」の名称が使われるのは多くの場合「大会宣言」に限られており、一般的な記述では「ボバ政府」とか「ボバ中央政府」と称されるのが普通である。本稿でもこれまで便宜上「ボバ政府」という名称を用いてきた。

張国燾がボバ政府を西北連邦政府の一部に組み込

む計画を持っていたことは、日本の研究では松本ますみ氏が『中国民族政策の研究 - 清末から1945年までの「民族論」を中心に』(多賀出版, 1999年, 208頁)の中ですでに指摘しているが、ゲダ活仏とボバ政府の関係には触れていない。松本氏は著書の中で、ボバ政府の意義を次のように説明しているが、同じく張国燾が指導したチベット人自治政府ゲラダサ共和国(格勒得沙, ギャロン語, チベット人の意, 1935年11月成立)への言及はない³⁹⁾。

この博巴人民共和国政府は、エスニック集団が社会進化のどのレベルにあるかを問わず自決権を積極的に支持し、連邦制建設を理想としていた「中国共産党」の指導のもとに建設されたエスニック集団による最初で最後の「人民共和国」であった。

つまりボバ人民共和国は、中国共産党内の張国燾グループが西北連邦政府構想の一環で指導し成立したものであり、党の総意ではなかった。こうして建国が宣言されたが、国家としての実体を備えないまま約3ヶ月間という短命「国家」に終わってしまった。ボバ政府成立の翌年にあたる1937年、中共中央政治局は張国燾の南下政策と第二中央樹立は誤りであり、少数民族政策は大漢族主義であるという決定を下した(「中共中央政治局关于張国燾錯誤的決定」(1937年3月31日)⁴⁰⁾)。

中国の研究書では、周錫銀『紅軍長征時期党的民族政策』(四川民族出版社, 1985年)が、張国燾路線とボバ政府の関係を詳しく論じている。本書はボバ政府の意義を「少数民族自治の実現」「少数民族の尊重」「信教の自由と宗教の保護」「紅軍の北上政策への貢献」「チベット人革命家の育成」という視点からプラスの評価をしつつも、張国燾路線の暴走がもたらしたマイナス面の影響を非難している。例えば「ボバ政府は独立した国家である」「ボバ自衛軍を創設する」「1936年を共和国元年と定める」とい

った主張を、張国燾の野心に満ちた権力闘争の表れと批判している⁴¹⁾。

民族自決を重視し分派行動を行った張国燾の民族政策は、その後彼自身が国民党との関係から1938年に党籍を剥奪されたことや、中国共産党がチベットを「中国領土の不可分の一部」と見なし民族自決を否定したことから、過ちであったと見なされている。中国政府が「ボバ人民共和国」ではなく「ボバ政府」「ボバ中央政府」という名称を使用する理由はここにある。

1936年7月1日、甘孜を発つにあたり朱徳はゲダに「紅軍朋友 蔵人領袖」という讃辞を贈ったと言われている⁴²⁾。この言葉は現在も中国共産党が長征時期のゲダ活仏を評価する際に用いられている。つまり「紅軍朋友 蔵人領袖」とは、ゲダ活仏が「朱徳を助け紅軍の北上政策に大きな貢献を行った」そして「ボバ政府の指導者として党の民族政策に尽力した」という意味である。二つの評価のうち、中国では前者の朱徳との関係は極めて重視されているが、後者が張国燾及び側近の陳昌浩との協力関係から論じられることはもちろんない。

4. チベット解放時期のゲダ活仏

4.1 18軍先遣部隊

1936年7月中旬、紅軍は甘孜を離れた。朱徳は別れ際ゲダ活仏に「紅軍は10年か15年後に必ず戻る」と言い残した。紅軍が発った後、国民党はボバ政府関係者への虐待を繰り返したため、ゲダはラサへ逃れて紅軍の無事を祈念したと伝えられている⁴³⁾。十数年が経過し中華人民共和国の成立を知ったゲダは、玉隆の首領夏克刀登や芒康の豪商邦達多吉と相談し、1950年2月側近の柏志と汪甲、及び通訳の澤郎を青海経由で北京の毛沢東と朱徳のところに遣わせた。そしてカム(東チベット)のチベット人は早期解放を願っている旨を伝えさせた⁴⁴⁾。ただしこの逸話は1950年中国人民解放軍のチベット進攻後に公表

されたものであり、その詳細を裏付ける資料は公表されていない。

1950年4月、朱徳の約束通り14年後、紅軍は中国人民解放軍に再編されゲダ活仏が待つ甘孜へ戻ってきた。チベット進軍を命じられたのは第18軍であり、1950年4月28日、52師団北路先遣部隊が甘孜県を解放した⁴⁵⁾。先遣部隊を率いたのは師団長の呉忠とチベット工作委員会委員の天宝であった。彼らの任務は18軍本隊の進軍に備えて、現地の軍事・政治・社会状況の調査、共産党の民族政策の宣伝、チベット人青年の入隊勧誘、チベット語通訳の雇用、道路整備、燃料・食糧の確保等であった⁴⁶⁾。

呉忠が甘孜で最も頭を痛めたのは三千人にも及ぶ兵士の食糧問題であった。海拔3000メートルを超す甘孜一帯は穀物の生産性が低く、現地住民の食糧自給をやっとまかなっている状況であった。早速呉忠が先頭に立ち、兵士たちに野草の採取や野ネズミの捕獲を命じた⁴⁷⁾。部隊の食糧を確保しつつ、チベット進軍の作戦基地を整備するには、甘孜で影響力を持つ土司・首領・高僧・豪商との協力関係を築く必要があった。呉忠等幹部が統一戦線工作の対象に選んだのは、当時カム(東チベット)の土司の中で最も権力を握っていた徳格(デルゲ)の降央白姆、玉隆の夏克刀登、白利寺のゲダ活仏、芒康の邦達多吉等であった⁴⁸⁾。

4.2 ゲダ活仏と老紅軍

先遣部隊は4月28日に甘孜到着後、孔薩土司の屋敷内に本部を設けた。呉忠ら部隊幹部は直ちに地元の孔薩土司や麻書土司を訪問して、進軍の目的と党の民族政策を説明し理解を求めた。そして農民たちを安心させるために兵士は村々をまわり、水汲みや薪割り、医療奉仕を通じて国民党軍との違いを訴えた⁴⁹⁾。

部隊本部へゲダ活仏がやって来たのは5月4日であった⁵⁰⁾。出迎えたのは、李奮(先遣部隊偵察科科长)・呉忠・天宝の三名であり、馬維超(偵察科チベット人幹部)が通訳を務めた。呉忠も天宝もいわゆ

る「老紅軍」であり、呉忠は第四方面軍の一員として1936年に甘孜での駐留を経験しているためゲダ活仏のことをよく知っていた⁵¹⁾。ゲダは「老紅軍」との再会を喜び、白利寺に彼らを招いて歓待した。図2は18軍兵士と語らうゲダ活仏の貴重な写真である。



図2 18軍兵士と語らうゲダ5世

Fig.2 The 5th Geda, talking with the 18th troops

ある日、呉忠は天宝を伴って白利寺を訪ねた。当時師団にいた顧草萍(52師154団副団長)は、作家暁浩の取材に「活仏は山西八路軍の戦闘図を経堂に掛け、朱徳の写真を大切に持っていた」と当時の様子を語っている⁵²⁾。二人は白利寺に一週間泊まり込み、紅軍と朱徳の思い出話に花を咲かせつつ、チベット解放の方策を話し合った。白利寺から西へ百数十キロメートルの所に金沙江が流れている。金沙江から西はチベット政府の支配地であり、守備兵も配置されている。呉忠と天宝は、解放軍が金沙江を越えてチャムド(昌都)へ向かうにはゲダ活仏の力が必要だと考えていた。

4.3 ゲダ派遣と交渉条件

先遣隊にとって最大の難題は、ダライ・ラマ政権に中国共産党による統治と解放軍の駐留を承認させることであった。呉忠はこの重大な任務をゲダ活仏に任せることにした。漢語を解さない活仏と協議を進めていく上で重要な役割を担ったのは天宝である、と筆者は考える。天宝は本名サンギェ・イエシエ(桑吉悦希, 1917年生)、現在の四川省馬爾康(マ

ルカム)生まれのチベット人である。天宝という名は延安の中央党校で学んでいた時に毛沢東が授けたものである。彼は1935年、18歳の時紅軍に加わり、張国燾と第四方面軍の指導の下、チベット人自治政府であるゲラダサ共和国(1935年11月成立)建設に尽力した経験を持つ(ゲラダサ革命党青年部長, ゲラダサ革命青年団中央団部長)。僧侶出身であること、チベット人自治政府の指導者となったこと、この二つの共通点はゲダ活仏との交渉を進めていく上で天宝の大きな武器となった。彼は後にチベット自治区党委員会書記など要職を歴任し、党のチベット政策の鍵を握る政治家になった。毛沢東が長征で手に入れた少年は、まさに「天が共産党に授けた宝」となった⁵³⁾。

筆者が調査した範囲では、ゲダ活仏との協議内容を記した天宝の文章は確認できていない。甘孜におけるゲダ活仏と18軍の関係を最も詳細に記した文献は、当時先遣部隊の参謀を務めた王貴と黄道群の共著『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』(中国蔵学出版社, 2001年)である。以下の記述は本書に依る。

中国共産党のチベット解放政策に賛同したゲダ活仏は、呉忠と天宝に対して以下の3項目の提案を行った(43 - 44頁)。

- (1)チベットを解放に導くには、信望が厚く党の政策に通じた実力者をラサへ派遣すべきである。さもないとチベット政府の指導者との面会が叶わない場合がある。
- (2)大金寺のケンポ(高僧)を帰省の名目でラサへ派遣してはどうか。このケンポは1930年にチベット軍と四川軍が甘孜一帯で衝突した際にチベット政府が送り込んできた代表である。ケンポに対して敬意と熱意をもって党の政策を説明しなければならない。
- (3)必要であれば私自身がラサへ協議に赴いてもよい。14年前に朱徳よりチベット政策の任務の重要性について聞かされているし、ラサに人脈もある。話が進めば、朱徳と劉伯承より具体的な任務

と身分と交渉条件について指示を賜りたい。

ゲダの申し出を聞いた二人は、活仏の身の安全を考え慎重に判断するように求めたが、ゲダの決意は固かった。李奮偵察科長は5月6日にゲダ活仏の意志を西南軍区司令部情報処に伝えた。このことはその日の内に朱徳の耳に入った⁵⁴⁾。

そして党西南局は5月11日、党中央に打電した(「西南局關於解放西藏の方針，政策向中央的請示(節録)」)。電文の一部はすでに公表されている⁵⁵⁾。資料によると西南局は党中央に対して、チベット政府がイギリス・アメリカ・ネパールと連携して軍備増強を行っているため、解放軍が進軍の準備を整えると同時に、チベット政府への説得工作に力を注ぐ必要性を訴えている。そして、カム(東チベット)の地理と政治情勢に詳しいブンツォク・ワンゲル(平措汪杰)が直ちに西康に戻り、ゲダがチベット行きを模索していることも伝えている。ただし、ゲダのチベット派遣にブンツォク・ワンゲルがどのような形で関与したのかは不明である。5月11日時点で、西南局が党中央に提示した交渉条件案は次の4項目であった。

- (1)イギリス・アメリカ帝国主義勢力をチベットから駆逐し、チベット人は中華人民共和国という祖国の大家庭に戻る。
- (2)チベットで民族区域自治を実施する。
- (3)チベットで実施されている各種制度は、当面現状を維持する。チベット改革に関する問題は、将来チベット人の意思に基づき協議の上解決する。
- (4)宗教活動の自由を保障し、寺院を保護する。チベット人の宗教信仰と風俗習慣を尊重する。

5月17日、党中央から西南局へ回答が来た(「中央復西南局有關西藏問題的電報(節録)」⁵⁶⁾。交渉条件案については西南局と西北局が再検討することが命じられた。派遣要員については、大金寺のケンポよりゲダを推す声が強く、ゲダ派遣の名目と職権は西南局が検討し中央に報告することになった。そこで西南局は、天宝と李奮に活仏との具体的な協議を進

めるよう命じた(44頁)。

日時は不明であるが、その後、朱徳は劉伯承と鄧小平に電報で「ゲダは進歩的なチベット人であり、役に立つ人物だ。甘孜の前線がゲダのチベット派遣を必要とした場合、代わりに回答してほしい」と伝えた(44頁)。同時に朱徳は、6月に北京で開かれる全国政治協商会議にゲダを招待したいので、チベット行きを遅らせる提案を行った。ゲダは協商会議よりもチベット解放を優先させる気持ちを書簡で伝えた(44 - 45頁)。書簡には「パンチェン・ラマとダライ・ラマの地位を保全する」「チベット貴族の生命・財産・安全を保障する」「民衆にしっかり広報活動を行い、少数の親英貴族を孤立させる」「チベット青海道路を復旧させ、玉樹ラサ道路を建設する」といった具体的な要望も記されていた。ただし、当時ゲダが親英貴族や道路建設を要望することは現実味に欠けるため、書簡はゲダの意志を尊重しつつも先遣部隊幹部が書いた可能性が高いと思われる⁵⁷⁾。

6月1日、北京の朱徳から活仏へ電報が届いた(「朱徳劉伯承給格達的復電」⁵⁸⁾。

天宝をへてゲダへ

来電拝読しました。チベットへ赴き和平交渉にあたられるとのこと、立派な判断をうれしく思います。交渉の条件は天宝より伝えさせます。この件でなにか意見がありましたらおっしゃってください。チベットへ入る名目についても意見をください。いずれにせよ活動しやすいようにいたします。

朱徳 劉伯承 六月一日

朱徳から電報が届いた翌日(6月2日)、党西南局は10項目からなる交渉条件をチベット工作委員会に伝えた(「西南局關於十項条件為和平談判及進軍基礎給西藏工委的指示」⁵⁹⁾。この条件は5月29日に党中央が批准したものであり、5月11日に党西南局が提案

した4項目の案やゲダからの要望も取り入れられていた。条件10項を以下に引用する。

- (1)チベット人民は団結してイギリス・アメリカ帝国主義侵略勢力をチベットから追い出し、チベット人民は中華人民共和国という祖国の大家庭に戻る。
- (2)チベット民族区域自治を実施する。
- (3)チベットで現在実施されている各種政治制度は現状を維持し一切変更しない。ダライ・ラマの地位と職権も変更しない。各級の役人にはこれまで通り職を与える。
- (4)宗教の自由を保障し、チベット仏教寺院を保護し、チベット人の宗教信仰と風俗習慣を尊重する。
- (5)チベットの現在の軍事制度を変更しない。チベットが保有する軍隊は中華人民共和国国防武装隊の一部とする。
- (6)チベット民族の言語と文字、学校教育を発展させる。
- (7)チベットの農業・牧畜・工業・商業を発展させ、人民の生活を改善する。
- (8)チベットでの各種改革についてはチベット人の意思に基づき、チベット人民とチベット指導者が協議することで解決する。
- (9)これまで英米や国民党と組んでいた役人は、英米帝国主義・国民党との関係を断ち切り破壊行為と反抗を行わないならば、すべて現職を維持し過去を不問とする。
- (10)中国人民解放軍がチベットに駐留し国防を担当する。人民解放軍は上記政策を遵守する。人民解放軍の経費はすべて中央人民政府が負担する。人民解放軍は公平な商取引を行う。

党西南局はチベット工作委員会に「条件」を正確にチベット語に翻訳し、チベット政府に提出するよう求めた。あわせて、「条件」の項目を宣伝ビラやポスター

に記載する場合、一部は認めるが全項目の記載を禁じる指示を出した。チベット工作委員会委員の天宝が「条件」の内容をゲダ活仏と大金寺のケンボに確認する。朱徳と劉伯承の判断により、ゲダ派遣の名目はゲダに一任する。プンツォク・ワンゲルは「条件」の内容について、関係各方面と協議すること。以上が党西南局からの通達内容の骨子である。

天宝は直ちに白利寺へ走り、ゲダに交渉条件を念入りに説明しチベット行を正式に要請した。相談の結果、西南軍政委員会委員兼康定軍事管制委員会副主任の身分で派遣することが決まった。「条件」にはゲダが書簡で要望したダライ・ラマの地位保全是記載されていたが、パンチェン・ラマへの言及はなかった。その理由は西南局が6月8日付で天宝及び党中央に宛てた電報の中に記されていた⁶⁰⁾。

彼(ゲダ活仏、川田注)が提出したパンチェン・ラマの地位保全という意見はもっともなことである。ただし条件の中には、ダライ・ラマ陣営への刺激を避けるために記載しない方がいいだろう。この点についてゲダに説明するように。条件の中にある一切の制度を変更しないという点に基づいて解釈すれば、パンチェンの地位もその中に含まれている。

チベット仏教ではダライ・ラマもパンチェン・ラマも最高位の活仏であるが、パンチェンがダライを補佐する役割が存在する。両者の間には側近も含めた権力闘争が続いていたため、パンチェンの地位保全という文言を記載しないことでダライ陣営への配慮を行ったと解釈できる。

先に見た6月2日付党西南局からの通達をもって、ゲダの派遣と交渉条件10項目は確定したと考えてよい。ゲダの派遣をめぐるのは、活仏の身の安全をいかにして確保するかという問題が常に議論されていた。そこで18軍幹部の王其梅や李覚は康定の軍事管制委員会にいる夏克刀登に依頼し、金沙江より西側

にいる首領宛に党のチベット解放政策への理解とゲダの保護を求める書簡を書いてもらった(46頁)。

4.4 チャムドを目指した「勸和団」

こうしてゲダ活仏は中国共産党が派遣したチベット解放の使者として、ダライ・ラマとの交渉にあたることになった。使者となることをゲダ自身が本当に望んだのか、党が朱徳との交友関係を利用して巧みに説得したのか、その真相は不明である。ただし、ゲダは共産党が手配した四人目の使者であることを考えれば、後者がより真相に近いと考えられる⁶¹⁾。チベット解放の使者は漢語では「勸和団」と呼ばれている。

一人目は彭徳懐が送り込んだ張竟成(第一野戦軍情報部チベット人偵察員)である。1950年5月、商人になりすまし、廖漢生(青海省人民政府副主席)がダライ・ラマと摂政の達扎に宛てた書簡及び高僧シェーラブ・ギャムツォ(喜饒嘉措)の言付けを携えてラサへ入ったが交渉は不調に終わった。

二人目は劉伯承が送り込んだ志清法師(密悟法師、ラサで学んだ漢人高僧)である。チベット軍が守る金沙江の関所を越えられずに失敗した。

三人目は再び彭徳懐が送り込んだタール寺の当才活仏(タクツェル・リンポチェ、ダライ・ラマ14世の長兄)を中心とする代表団が7月に西寧を出発した。夏日倉活仏(青海省隆務寺)と先靈活仏も同行したが、情報の漏洩や自然条件に阻まれて頓挫した。

彼らはいずれも毛沢東の側近が遣わした使者であったが、ダライ・ラマと直接交渉するには至らなかった(1950年2月 - 7月)。そして四人目の使者に選ばれたのがゲダ活仏であり、白羽の矢を立てたのはかつての「紅軍朋友」である朱徳と劉伯承であった。彭徳懐、劉伯承、朱徳いずれも党中央の政治の中枢にいる軍人幹部であり、ダライ・ラマへの説得工作を担った各「勸和団」の活動は、極めて軍事的色彩の濃いものであった。

5. 「勸和団」の挫折とチベット解放

5.1 1950年チャムドに関する記述

ゲダを中心とした四番目の「勸和団」も結局ラサへ到着することは叶わず、途中のチャムド(昌都)での挫折を余儀なくされてしまった。甘孜出発からチャムドでの圓寂までの1ヶ月余りの行動を検証するための資料は以下の8点である。

- (1)「西南軍政委員会委員格達惨遭英帝特務分子毒害身死」(1950年12月3日新華社)、『有關西藏問題的文件和材料選集(国内部分, 1949 - 1959)』新華社通訊編印, 1959年6月, 140 - 141頁。
 - (2)来作中「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」(資料提供者: 鄧珠拉姆・于在濱・阿都澤呷), 中国人民政治協商會議四川省甘孜藏族自治州委員会編『四川省甘孜藏族自治州文史資料選輯』第2輯, 1984年6月。
 - (3)周錫銀「為西藏和平解放而献身的格達活仏」『西藏研究』1984年第3期, 18-23頁。
 - (4)「格達」, 曾国慶・郭衛平編著『歴代藏族名人伝』西藏人民出版社, 1996年, 359-366頁。
 - (5)周錫銀「格達活仏」, 藍宇翔・周錫銀主編『四川少数民族紅軍伝』四川人民出版社, 1996年, 281-291頁。
 - (6)晁浩『西藏, 1951年 - - 人民解放軍進蔵実録』民族出版社, 1999年。
 - (7)郝桂堯『曙光從東方升起 - - 昌都战役与和平解放西藏紀実』四川民族出版社, 2000年。
 - (8) Robert Ford, *Captured in Tibet*, GEORGE G. HARRAP CO. LTD, 1957。
- (1)はゲダ活仏の圓寂の原因を3ヶ月後に報じた新華社電の原稿である。「ゲダ一行はチャムドで党のチベット解放政策を宣伝し成果をあげたが、イギリス帝国主義のスパイであるフォードに殺害された」という内容である。(2)~(5)の記述は中国共産党の公式報道である(1)を踏まえたものである。(6)と(7)は(1)の見解に基づき、当時のチャムドの政治を紹介しつ

つ、ゲダとチベット政府の行動を詳細に記したものである。作家によるルポルタージュの形式をとっているが、内容は軍事行動の側面から描かれており、党と軍の主張を最大限に取り入れたものである。(6)は解放軍のチベット進軍を讃え、(7)はチャムド(昌都)解放50周年を記念した作品である。作者は同一人物であり、郝桂堯が本名、暁浩は筆名である。(8)は中国共産党によりゲダ活仏の殺害犯とされたイギリス人ロバート・フォードの回顧録である。彼は中国共産党とは異なる視点から、1950年当時のチャムドの動向とゲダ活仏の圓寂について証言している。

5.2 チャムド滞在

ゲダが甘孜を出発した日時は1950年7月4日、7月10日の二説があるが、2004年発行以後の中国共産党公式資料では7月10日となっている⁶²⁾。出発の日、呉忠と天宝が僧院前で見送り、先遣部隊偵察科の参謀張恒心が金沙江の渡し場までの百数十キロメートルの護衛を担当した⁶³⁾。呉忠は護身用にアメリカ式のカービン銃2丁を活仏に渡した⁶⁴⁾。ゲダ一行は無事に川を渡るとメインルートを避け、カ松渡から覺雍を経てチャムドへ至る北側のルートを取り安全の確保に努めた。そのため徳格(デルゲ)の先遣部隊はチャムドから来た商隊からゲダの消息を確認することができなかった。

チャムドへの途上、ゲダは随所で土司や部族長、高僧に対し中国共産党の民族政策を訴えた。そしてチベット軍第3団に行く手を阻まれるという事件にも遭遇したが、7月24日にチャムドに到着した⁶⁵⁾。先遣部隊が商人の話からこの情報を得たのは8月中旬であった⁶⁶⁾。

当時チャムド統治の最高責任者はラル(拉魯)長官であった。ラルの証言によれば、ラルはゲダと面識があり書簡を交わす仲であった。ゲダ一行が金沙江を越えてチャムドへ向かうのを許可したのもラルであった⁶⁷⁾。ゲダはさっそくラルの屋敷へ行き、チベット解放の必要性を説いて三つの条件を伝えた⁶⁸⁾。

- (1)チベットを中国の領土と承認すること。
- (2)国境警備は解放軍が行うこと。
- (3)旧チベット地方政府は帝国主義と一切の関係を絶つこと。

チベット政府にとって、ゲダは尊敬すべき高僧であったが、同時に中国共産党が送り込んできた邪魔者にほかならなかった。そこで、チベット政府はラルに三つの指示を送った⁶⁹⁾。

- (1)ゲダをラサに行かせてはならない。
- (2)甘孜に戻してもならない。
- (3)チャムドで自由に活動させてはならない。

チベット政府の巧みな戦術により、チャムドで約1ヶ月間の足止めを余儀なくされた。当時の状況をラルは次のように語っている⁷⁰⁾。

ゲダ活仏は言った「もうすでに危険な時期にさしかかっている。進軍を遅らせる期限は1ヶ月しかない。その時が来たらすべて終わりだ。私は尋ねた「なぜそれほどまでに解放を急がなければならないんだ」。彼は答えた「チベット解放は毛主席とスターリンが相談して決めており、ソ連の支持が得られている。チベットを解放するために、ソ連はガス69という数百台の車輛も支援した。チベットは世界の屋根であり、各国が争奪をくりひろげているので早くチベットを解放しなければならない」。

チャムドへの進軍が決定済みであることを知ったラルは、ゲダにマタン(瑪塘)からジャンガ(江嘎)への転居を勧めた⁷¹⁾。そこはフォードというイギリス人が管理する無線所内であった。数日後、フォードは事務所にてゲダを招いた際、コーヒーに毒を混ぜて殺害し、証拠隠滅をはかるため活仏の遺体を即座に茶毘に付し、従者をラサへ強制連行してしまった(ゲダ殺害事件については後述する)。

ゲダの命日は8月22日とされているが、先遣部隊が商人から訃報を知ったのは9月初旬であった。そ

の後、チャムドから徳格へ逃げ帰った従者の一人が、李奮科長に「ゲダ活仏が奴らに殺されてしまった」「お茶を飲んで死んでしまった」「奴らの手下がやったんだ」と伝えた⁷²⁾。

5.3 二つの「解放」

活仏の訃報が先遣部隊から党中央に届くと、毛沢東は甘孜に中央民族訪問団を派遣し、鄧小平は重慶で追悼集会に参加した。劉伯承は「挽聯」(死者を悼む対聯)を送って弔意をあらわした。先遣隊も甘孜で部隊葬をとりおこなった⁷³⁾。西康省政府は鄧小平(当時西南軍政委員会副主席)の指示を受け、当時で一千万円もの巨費を葬儀関連の行事に投じた。こうした一連の行動は、チベットの民衆とダライ・ラマ政権に対する政治宣伝を目的としたものであった。党・軍・政府を挙げて「祖国解放の闘いに殉じたチベットの英雄」を祭ることで、共産党が主導する民族の団結と支持勢力の拡大を訴えたのである。

中国共産党はゲダ殺害の犯人はフォードであり、彼はチベット政府が雇用したイギリス人スパイであると認めている。ゲダというチベット平和解放の使者は、イギリス帝国主義の毒牙に倒れてしまった。チベット政府はイギリスと結託して暗殺という卑怯な手段を用いて平和協議の門を閉ざした以上、中国共産党は武力を行使してでもチベット人民をイギリス帝国主義から解放しなければならない。こうしてゲダの殉死とチベット解放を大義名分にして、中国は8月26日チャムド進撃の号令を発した⁷⁴⁾。

ここで、あらためて「チベット解放」という概念について考えてみる。平野聡氏は『岩波現代中国事典』(岩波書店、1999年)に「チベット解放」の項目(775頁)を執筆した後、「『解放』とは何か - 『チベット解放』からみた一考察」(『中国』第16号、中国社会科学学会、2001年6月)という論文を発表した。その中で、中国政治史言説における「解放」という概念を次のように説明している⁷⁵⁾。

一般的に、日本及び中華人民共和国で、中国政治史に関して「解放」という概念が使用されるのは、革命史の展開と政治権力の変遷という観点から「国民党支配から共産党支配への移行」を表現しようとする場合であろう。

その上で、この「解放」概念の延長として「チベット解放」をとらえることは適切ではないとして、「チベット解放」を二つの段階に分けて規定している⁷⁶⁾。

ゆえに、ダライラマ政権のチベットをめぐる「解放」とは、「帝国主義からの解放」と、その後の「人民の願望に基づく自発的な改革」「民族区域自治実施の権利行使」による全国との同一化＝真に労働人民の願望を実現する「解放」という、性格が異なる二段階の政治過程によって構成されることになる。

後者の「解放」とは、言うまでもなく一九五九年春に頂点を迎えるチベット動乱と、その後いわゆる「反動農奴主」から土地を没収して分配する「民主改革」に至る過程である。

「解放」という言葉には、中国共産党による権力の正当化と歴史認識が込められており、具体的な政治的事件の関連で分析するという平野氏の主張に筆者は異論はない。ゲダ活仏という中国共産党の使者に託した「チベット解放」とは、平野氏が言う前者の解放、つまりイギリスという「帝国主義からの解放」を指している。

ただし、毛沢東は前者の「チベット解放」の準備を進める中で、1950年1月2日モスクワから党西南局へ「チベット経営」問題に関する電報を打っている(「毛沢東関于由西南局籌劃進軍及經營西藏問題的電報」)⁷⁷⁾。

チベットは人口こそ多くないが、国際的な地位は極めて重要である。我々は必ず占領して人民民主のチベットに改造しなければならない。

1月10日に党中央に宛てた電報には次の一文がある(「毛沢東関于進軍和経営西藏問題的電報」)⁷⁸⁾。

チベットを経営するには党の指導機関を作らねばならない。名称と委員の人選は西南局が行い、中央に連絡して批准を得ること。

建国後、党のチベット政策の中心にいた陰法唐は、「経営とは管理の意味だ」と語っているが、毛沢東が考えていた「経営」とは「武力による占領」を意味している⁷⁹⁾。1949年11月23日、彭徳懐に宛てた電報には「チベット問題を解決するには、出兵しないことはありえない」とはっきり書かれている⁸⁰⁾。1950年における「チベット解放」とは、「帝国主義勢力の追放」を大義名分とした「チベット経営」、つまり「武力による占領」であった(「解放」と「経営」の概念については、別稿であらためて論じたい)。チベットを経営する前提として、イギリス帝国主義をチベット人民の敵と見なし打倒する必要があった。ゲダ活仏に毒を盛ったフォードというスパイの存在は、中国共産党にとって願ってもない標的となった。

6. フォードの回顧録

6.1 通信員フォード

ゲダの死から3ヶ月余りが経過した12月3日、北京の新華社がゲダの訃報を伝えた⁸¹⁾。

【新華社北京1950年12月3日電】遅れて届いたニュースであるが、西南軍政委員会委員兼西康省人民政府副主席ゲダ活仏(チベット人)が、チベットの平和解放に尽力したがために、8月22日チャムドでイギリス帝国主義のスパイに毒殺された。スパイのフォードはゲダ活仏を殺害後、遺体を燃やし証拠を隠滅したため、このニュースは最近になって事実が確認された。

中国共産党は犯人をフォードと断定し報道したが、後にフォード自身は回顧録の中で明確に否定している。ロバート・フォード(Robert Ford)は、元イギリス空軍通信学校教員である。1950年10月、「ゲダ活仏を暗殺したイギリスのスパイ」容疑で、チャムド(昌都)にて解放軍に身柄を拘束された。Captured in Tibet(チベットに囚われて)は、裁判が終了し国外追放となった後に著したものである(近藤等訳『赤いチベット』新潮社、1959年あり)。チベット政府との雇用関係、チャムド通信所での職務内容、ゲダ活仏事件の顛末、そして逮捕・尋問から獄中生活までが克明に記されている。記述内容のすべてが事実であるという保証はないが、イギリス人の目を通して描かれた1948年から1950年までのチベット政府の政治と軍事の動向、チベットと中国の通信事情や政治的緊張関係等は大変貴重な歴史資料である。

回顧録によれば、フォードが通信技師としてチベット政府と雇用契約を結んだのは1948年であった。契約期間中は貴族に準じる待遇が与えられ、当時13歳のダライ・ラマ14世から直接祝福を受けることも許された。ラサではカクテルを飲み、サンバを踊り、テニスやブリッジも楽しむことができ、インドから届けられる3日遅れの新聞も手に入った。フォードはラサで1年近く滞在する間に、チベット政府が管理する通信所を開設した。

1949年夏、中国軍の進攻に備えるため東チベットのチャムドに派遣され、新たに通信所を開いた。12人の護衛兵を従え、発電用ガソリン1800リットルをヤク(チベット牛)の背に乗せ、ラサからチャムドまで約800キロメートルを2ヶ月がかりで移動した。必要な機材はインドから調達した。

チャムドとラサの間では、暗号化されたチベット政府の公文書が頻繁にやりとりされるようになった。チャムドで暗号の管理を行ったのは四品官の卓嘎武瓦であった⁸²⁾。その外、商人たちの通信業務を請け負うこともあった。北京やデリー・ロンドン・

モスクワからのラジオ放送を聴き、情報収集を行うことも重要な任務であった。フォードがラサやチャムドで使用した無線機材はアメリカとイギリスから提供されたものであり、必要な部品はインドから購入した。チベットでの発電は1920年代に始まり、技術と設備はイギリスが提供した⁸³⁾。チベットのメディア史を研究している周徳倉は、著書『西藏新聞傳播史』の中で、フォードが無線を通じてチベット独立を宣言したと書いているが、事実関係は不明である⁸⁴⁾。その頃、チベットの早期解放を目指す中国共産党の軍靴の音は着々とチャムドに近づいており、軍事衝突を予感させる緊迫した状況にあった。事実、1950年10月、ゲダ5世殺害後、中国人民解放軍はチャムドへ武力進攻を行った。

北京からの放送は、中国がチベットをアメリカ・イギリス帝国主義の支配から解放する必要性と意義、そして中国共産党が掲げる宗教保護政策を繰り返し訴えた。中国政府がチベット語のラジオ放送（中央人民広播電台）を開始したのは、1950年5月である。毛沢東は中央統戦部長の李維漢をチベット語放送の責任者に任命し、チベット解放に向けた政治宣伝活動を重視するよう指示を出した。放送は週3回、午後11時から1時間、チベットの官僚や貴族を対象にしていた⁸⁵⁾。

チャムドではフォードが北京からの放送を受信していた。彼は同時にラサのチベット政府からの放送も毎日聴いていたが、チベット政府はチベット独立を訴えたり中国の威嚇に反論することはまっぴらななかったという。フォードの通信所は、チャムドを統治するラル長官の夏の離宮に設置された。護衛兵・料理人と2人の通信員兼事務員（インド人）を雇って通信所は運営された。ゲダが亡くなったのはこの通信所内であった。

6.2 ゲダ活仏の最期

先の新華社電はゲダの死を次のように報じた⁸⁶⁾。

イギリス帝国主義のスパイ・フォード及び共犯者は、ゲダ活仏を監視しチャムドから離れることを許さなかった。そして8月13日毒を混ぜた茶を飲ませ、フォードの事務所の階下に軟禁し、従者を近づけなかった。男女の弟子たちが見舞いに来たが、面会は叶わなかった。ゲダ活仏は毒を盛られた後も、ラサの知り合いへ電報を打ちラサ行きの方策を講じようとした。そして「死んでも悔いはない、ラサへ行きダライ・ラマ猊下との謁見を願うばかりだ」と語った。このことが帝国主義のスパイたちの恐れと恨みを引き起こし、彼らは再び毒を盛り、8月21日ゲダ活仏は毒を服した。ゲダ委員は毒がまわると、腹と頭が痛み、黄色い液を吐き出し、耳から血と膿が流れ、手足が麻痺した。翌日（8月22日）圓寂した。死後全身が黒ずみ、皮膚に触れるとすぐにはがれ落ちた。フォードは犯罪の証拠を隠滅するために、ゲダの遺体を焼却し従者をラサへ移送した。

フォードは活仏をお茶に招いたことは認めているが、ゲダが死亡したのはそれから1週間後であった。そのときのゲダ活仏の様子を次のように語っている。「物腰はおだやかで、憤り深かった」「民衆はゲダが共産党の使者であることを知っていたが、活仏として敬っていた。チベット軍兵士さえも、ゲダに尊崇の念を抱いていた」「ゲダは毎日ラル長官の公邸に通っていたが、ラルはチベット解放を望んでいなかった」。

フォードの記述によると、チャムド滞在中、ゲダ活仏の健康状態が急激に悪化し、危篤状態に陥った。その後、ラルは僧院から医師を呼びよせ、薬草による処方依頼したが、全く効き目はなかった。二十人あまりの僧が読経を行い活仏の健康回復を祈念したが、8月22日に息を引きとった。そして高僧への葬儀儀礼を無視して、翌日遺体は慌ただしく茶毘に付されてしまった。

一方、ラル長官はゲダの最期を次のように語って

いる⁸⁷⁾。

最初は風邪のようであり、その後症状がしだいに重くなっていった。ある日病状が急変し、ジャンガ（江嘎）に住んでいた四品官・卓噶武瓦がすぐにチャムド（昌都）の医師札果奔拉を呼び寄せて診察してもらった。診察の結果は「胃腸の激痛」であった。薬の処方を受けたところ、ゲダ活仏が「薬を持参している」と言い、小さな薬袋から丸薬を取り出して服した。しかし病状は一向に好転せず、その日の夜に息を引きとった。

ラルの証言は1980年代後半から1990年代前半のものと思われる。彼は1959年にダライ・ラマが亡命後不遇の人生を歩み、文化大革命では激しい批判に見舞われた。文革終結後、チベット自治区の政治協商会議の委員となり、1983年には副主席に任命され中国共産党の統一戦線活動に従事した⁸⁸⁾。そのような政治的立場からの証言であるが故に、彼が事件の真実を語っているとは考えにくい。フォードとゲダの関係にもまったく触れられておらず、ゲダが持参していた薬と症状急変の因果関係にも不自然さが感じられる。従って、ラルの証言は全面的に真実を語ったものとは言い難い。

6.3 フォードの拘束と撮影記録

チャムド（昌都）陥落直後の1950年10月21日、解放軍は即座にフォードの身柄を竹各寺付近で拘束した⁸⁹⁾。翌日、解放軍はフォードと他の捕虜を寺院に連行し、昨日の拘束場面を再現させてその映像を記録した。その様子をフォードは次のように記している。

撮影機が据えつけられ、チベット兵に、昨日取りあげた銃が渡される。彼らが進み出て、改めて銃を渡すところが、映画に取られる。それから円陣を作って、笑顔を作るように命じられ、それをまた撮影機が記録する。今度は、携

帯機銃を持った二人の兵士にかこまれた私に、カメラが向けられる。それから、いくつかのシークウェンスが撮影される、熱心に中国軍を歓迎する僧侶たち、カーム地方の全軍の降伏文書に署名するヌガボ。（近藤等訳『赤いチベット』145頁、*Captured in Tibet* 138頁）



1950年10月、進藏部隊解放昌都。在战斗中俘虏一名英国特务分子，名叫福特。

図3 チャムドで解放軍に拘束されたフォード

Fig.3 Ford, detained by the Liberation Army in Changdu

図3は『西藏50年歴史巻』（民族出版社、2001年）に掲載された写真である。チベット民族衣装の上に皮のジャンパーを着ているのがフォードである。彼はチャムドでは貴族に準じる待遇を受けていたため、普段からチベット服を着用していた。その上に皮のジャンパーを着ているのは不自然であり、撮影の際、イギリス人であることを目立たせるために解放軍が着用を命じたと考えられる。

図4も同じ日に撮影されたものであろう。解放軍の幹部が捕虜となったチベット兵たちに中国共産党の捕虜政策を説明している場面である。最前列中央にフォードが同じ服装で座らされ、いかにも不満そうなポーズをとらされている。その後、捕虜は一列に並ばされて、ラサへの通行証と現金が手渡され妻子を連れてラサへ帰るように命じられる場面が撮影された⁹⁰⁾。この写真が掲載されたのは、香港の新大陸出版社有限公司が発行した『達頼喇嘛和西藏』（2006年、105頁）と



図4 解放軍より捕虜政策の説明を受けるフォード

Fig.4 Ford, receiving an explanation from the Liberation Army on its policy toward captives

いう書籍である。軍事機密に属するこの写真がどのような経緯で香港に流出したのかは不明である。

この場面には先遣部隊参謀の王貴と黄道群は、154団の楊軍政委員が僧侶と民衆そして数千人ものチベット軍捕虜を集めて大規模集会を開き、帝国主義のチベット侵略とフォードの罪状を厳しく糾弾したと語っている⁹¹⁾。

フォードは大会の一場面を次のように書いている。

彼は(154団の楊軍政委員、川田注)チベット人たちに、中国人が彼らの国を侵した理由を説明し、カンパのガイドが、すこしずつ、これを通訳する。

「私たちは諸君に平和をもたらしに来た。」この言葉は、少なからず一同を驚かせた。「私たちが来たのは、外国の悪魔から諸君を解放するためである。シナ人とチベット人は兄弟だ。一つの民族、一つの国民である。」これもあまり共鳴を起こさせないようだ。俺たちの言葉を話すこともできないじゃないか。「私たちの仲を隔てていたのは、外国人たちだ。諸君を奴隷にして、母なる祖国から離反させたのは、奴らだ。高い鼻と、青い眼と、白い皮膚とで、すぐに見分けがつく。」彼は意味ありげな一瞥を、私の方に送る。「人民解

放軍がやって来たのは、奴らを放逐して、諸君を自由にするためである。」(近藤等訳『赤いチベット』145頁、*Captured in Tibet* 138 - 139頁)

上の引用には、中国共産党のチベット解放の意義がはっきりと語られている。つまり、解放軍がチャムドに進攻した目的は、中国の一部であるチベットをイギリス帝国主義という悪魔から解放するためである。中国にとってフォードはイギリスという悪魔を象徴させる格好の存在であり、大規模集会という舞台上でフォードを批判の標的にすることで武力行使の正当性を訴えたのである。

6.4 調査・自白・判決

集会が終了すると、李奮(先遣部隊偵察科長)はフォードをラル長官の屋敷へ連行して尋問を開始した。この時、劉景豊が英語通訳を、参謀の王貴が記録係を務めた。李奮は解放軍の捕虜政策を説明した後、フォードにスパイの供述を迫ったが彼は無言を貫いたという⁹²⁾。

その後、フォードの身柄は甘孜(カンゼ)・康定・成都を経て、12月に重慶の留置所へ移送された。重慶で取り調べを担当したのは西南軍政委員会公安処である⁹³⁾。先の新華社ニュースが発表されたのはちょうどこの時期である。西南軍政委員会はフォードの身柄を確保した時点で、18軍部隊から受けた二度の調査報告に基づき事件の詳細を発表したのであるが、その時フォードはまだゲダの殺害を自白していなかった。

ゲダ事件の調査を担当したのは18軍の王其梅政治委員であった。彼はチャムド陥落後すぐにゲダ事件の調査に着手し、10月29日に中央軍事委員会へ調査報告を打電した。報告内容の一部が『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』に掲載されている⁹⁴⁾。

チベット暦6月15日(陽暦7月24日)、ゲダはチャムドに到着するとすぐに、民衆と僧侶に向か

って我が党我が軍の政策規律及び国内外の情勢に関する宣伝を行った。そしてチベット仏教寺院・首領・民兵に解放軍への攻撃に加わらないようにと説いた。××は一度だけゲダと面会した、その際第三者は同席しなかった。7月3日、地震と激しい雷雨あり。××はそのことにかこつけて、ゲダは解放軍を代表してここへ乗り込んできたのでゲダを殺せと公言した。×××(官名仁希)は、ゲダは転生ラマなので殺すことはできませんと申し出た。ゲダは生前ここに長居するとは思っていなかった、ラサへ行くか甘孜へ帰らせてほしいと言った。××は許可しなかった。ゲダはチャムドへ着いた当初、木嘎宅に滞在していたが、7月7日(発病から二日目)松松宅に移り、8日龍王堂(イギリス人フォードの通信所)の階下へ越した。×××に監視され、外部の者との接触を禁じられた。ゲダの従者も接見を許されなかった。ゲダは亡くなる数日前から食事がのどを通らず、黄色い液を吐き出し、腹と頭が痛み、耳から血と膿が流れ、手足が麻痺した。7月12日(陽暦8月22日)死後全身が黒ずみ、皮膚に触れるとすぐにはがれ落ちた。遺体は僧院の裏山で焼却された。

その後、54師団副政治委員兼チャムド工作委員会委員の恵毅然は数名の幹部を率いてチャムド入りし、ゲダ事件の再調査を行った。11月20日、王其梅と恵毅然はその結果を西南局に報告した。同じく『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』に掲載された報告の一部を示す⁹⁵⁾。

西南軍政委員会委員兼康定軍制管理委員会副主任ゲダ活仏一行四十余名は、7月24日(チベット暦6月15日)チャムドに到着した。その時、チャムドの寺院・住民・郊外の者こぞって大歓迎した。ゲダ委員はチベット人民を代表して、×××と昂旺勤巴に対してチベット平和解放に

関する協議を求めたが、不当にも拒否された。そこで僧侶と人民に中央人民政府の少数民族政策と毛主席のチベット人への敬意を伝え、多くの人民の支持を得た。××及びイギリス人スパイは殺意と謀略を顕わにしていなかったが、ゲダが8月13日(チベット暦7月2日)にジャンカ(江カ、イギリス人スパイの居住地)へ来て、ラサ政府との相談の電報を打ちに来た機会に乗じて、コーヒーに毒を混ぜた。夜に毒はまわり、翌日症状は激しさを増したが死に至らなかった。... (中略).....8月21日(チベット暦7月10日)、××はお抱えの医師を派遣し、最後の毒を投じた。その後、誰もゲダに会うことを許されなかった。22日午前、ゲダ殉死。訃報を知った家主の木嘎は嘆き悲しみ、男女の弟子や人民は悲嘆に暮れた。

王其梅と恵毅然は西南局に対して、訃報の公開と追悼行事では××の名を伏せ、帝国主義と結託した反動分子に毒殺されたと公表すべきだと申し出た⁹⁶⁾。殺害の共犯者とされる××の名を当時公表しなかった理由は、解放軍の進攻とチベット解放を円滑に進める上で、フォードを犯人に仕立てる方が好都合であり、チベット政府と住民を敵に回したくないという共産党の思惑があったからである。伏せ字になっている人物は、チャムド長官のラルと考えるのが妥当であろう。理由はチャムドでゲダと面会し、ラサ行きを許さず、病に倒れたゲダに医師を派遣したのはラルだからである。フォード自身は回顧録の中で、自白を行ったのは監獄を出るためであり、自分が犯人であることを明確に否定している。彼の言葉が真実であるならば、事件の首謀者はやはりラルということになる。

引用を見てわかるように、二つの報告内容に基づいて、12月3日の新華社発表が行われたのである。その後ゲダに関する各種評伝はこの二つの報告と新華社ニュースに依拠して書かれていった。解放軍が

軍の幹部に調査を命じた以上、その内容は党と軍に都合の良いものであると考えるのが自然であろう。報告内容の客観性と真偽を検証することは、今となっては不可能である。

新華社は犯人をフォードと断定した報道を行ったが、取り調べに当たった西南局軍政委員会はフォードの犯行を裏付けるに足る証拠を握っていなかった。そこで、その後もフォードに対して執拗な自白の強要が行われた。

回顧録によれば、フォードはイギリス政府のスパイであることもゲダ活仏を殺害したことも否認し続けた。軍政委員会は当初、留置所内のフォードにタバコを支給したり、クリスマスを祝ったりするなどの配慮を見せたが、期待通りの自白が得られないとわかると軍用監獄の独居房に移し、心身ともにダメージを与えつつ繰り返し自白を迫った。軍政委員会の執拗な圧力に耐えきれず精神が極限状態に追いつめられたフォードは、虚偽の自白を行うことで出獄の道をさぐる決意をした。検察が作成した自白調書に署名する場面は、関係者が入念に撮影した⁹⁷⁾。

現在中国政府は調書の存在は明らかにしているが、詳しい内容は公表していない。チャムドでの取り調べに立ち会った先遣部隊参謀の王貴は、著書『西藏歴史地位辨』の中で自白調書に関する情報を示している⁹⁸⁾。記録の残る自白は1951年1月22日、12月28日、1952年1月23日である。調書の上では、フォードは「私の教唆により」毒殺が行われたことを認めている(1951年12月28日)。そして1952年1月23日、供述調書にサインしたとある。

その内容の一部を示す。「ゲダをラサへ行かせるわけにはいかない。彼をチャムドに足止めしておく唯一の方法は殺害することだ」「ゲダ・ラマはチャムドで殺害された。その理由はゲダ・ラマがラサへ行き、共産党のチベット平和解放の条件を提出するのを阻止するためだ」。そして殺害後の様子をこう語った。「チャムドの雰囲気は彼の死を忌み遠ざけたものであり、誰も口にしようとはしなかった。

人々は彼の死に哀悼の意を表していた。私は遺体を見なかったが、鼻や耳から血が流れていたと聞いている」(1951年1月22日)。

軍政委員会はフォードの犯行を裏付けるために、チャムドの無線所で技師をしていたインド人のワンダに対しても重慶で取り調べを行った。ワンダは「フォードはゲダ・ラマの死に責任を負っている」と証言した(1951年12月6日)⁹⁹⁾。

チャムドでの逮捕から4年後の1954年12月、裁判所はフォードに判決を下した¹⁰⁰⁾。

- (1)中華人民共和国へ不法入国した罪
- (2)治安を乱すスパイ活動を行った罪
- (3)チベットで分離主義運動を煽動した罪
- (4)政府官吏の暗殺に関与した罪

裁判官は10年の禁固刑を言い渡したが、最終的には中国政府の判断で国外追放処分となった。フォードは後に回顧録の中で、ゲダの死についてこう記している。

私としては、ゲダが暗殺されたと信じるに十分な理由を持っている。誰が殺したのかも、知っているつもりだ。その人が誰か、永久に発見されないことを祈るばかりである(近藤等訳『赤いチベット』91頁、*Captured in Tibet*, 83頁)。

中国政府が保管する自白調書の中に、フォード自身がゲダを殺害したという記述があるか否かは不明である。

6.5 犯人をめぐる記述

中国側の文献でゲダ事件の犯人がどのように記述されているかを確認する。

(1)フォードが毒殺

- (a)「西南軍政委員会委員格達慘遭英帝特務分子毒害身死」(1950年12月3日新華社)、『有關西藏問題的文件和材料選集(国内部分, 1949 - 1959)』新華社通訊編印, 1959年6月, 140 - 141頁。

(b)格勒『甘孜藏族自治州史話』四川民族出版社，1984年，286頁．

(c)来作中「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」，中国人民政治協商會議四川省甘孜藏族自治州委員会編『四川省甘孜藏族自治州文史資料選輯』第2輯，1984年6月，16頁．

(d)吉柚権『白雪 - - 解放西藏紀実』中国物資出版社，1993年，125 - 126頁．

(e)師博主編『西藏風雨紀実』中国華僑出版社，1993年，22 - 23頁．

(f)「格達」，曾國慶・郭衛平編著『歴代藏族名人伝』西藏人民出版社，1996年，366頁．

(g)郝桂堯『曙光從東方昇起 - - 昌都戦役与和平解放西藏紀実』四川民族出版社，2000年，119 - 120頁．

(2)フォード及びラルが派遣した医師が毒殺

(h)周錫銀「為西藏和平解放而献身的格達活仏」『西藏研究』1984年第3期，22頁．

(i)周錫銀「格達活仏」，藍宇翔・周錫銀主編『四川少数民族紅軍伝』四川人民出版社，1996年，289 - 290頁．

大半の文献が「イギリスのスパイであるフォード」「イギリス帝国主義のスパイであるフォード」が殺害したと書いている．ただし(d)は，李科長の取り調べに対してフォードは「事件の経緯はラルが知っている」と回答している．(a)~(g)の資料は，18軍による調査と意向及び党中央の判断を踏まえ，ラルが犯行に関与したとする記述を意図的に避けている．(h)と(i)は同一人物によるものであり，ラルが派遣した医師も犯行に関与したと書いている．

次に，日本の文献を確認する．

(j)秋岡家栄『チベットの旅』佼成出版社，1977年，139 - 143頁．

(k)島田政雄『チベット - - その歴史と現代』三省堂，1978年，165 - 169頁．

(l)阿部治平『もうひとつのチベット現代史 - - プンツォク = ワンゲルの夢と革命の生涯』

明石書店，2006年．

筆者が調べた範囲では，ゲダ殺害事件は日本の新聞に報道されていない．秋岡氏と島田氏は1977年に、『日本と中国』紙代表団(日本中国友好協会機関紙)の一員としてチベットを訪問した．二人は天宝よりチベット解放の意義を説明された際，ゲダ事件のことを知った．秋岡氏は次のように書いている¹⁰¹⁾．

ところが，このカタコフ(ゲダ活仏，川田注)さんが横断山脈を越えて昌都へ着いたところで毒殺されてしまいます．

「犯人はフォードというイギリス人でした．土地の支配階層と結託したのです」

ティエンパオ(天宝，川田注)さんの声が曇ります．

チベットのなかにはやはりタカ派が強かったです．カタコフさんがダライ・ラマ十四世と会って，もしダライ・ラマがハト派になったら，という心配から，いっそのことカタコフさんを殺してしまえ，ということになったのです．使者を殺すなんて，これは全くのルール違反でした．

島田氏も天宝から聞いた同様の話を記している．1977年当時，天宝はチベット自治区革命委員会副主任であり，共産党幹部という立場から「犯人はフォードである」と話した．「土地の支配階層」とはチャムド長官ラルを指しており，1950年に先遣部隊の一員としてチャムドに入った天宝は，事件はフォードの単独犯ではなくラルとの共犯であると見ている．当時朝日新聞社記者であった秋岡氏は，ゲダ活仏を「カタコフ」と記している．これは「格達活佛」の漢語音「Geda huofu」を「カタコフ」という人名と判断したことに起因する誤記である．フォードの回顧録『赤いチベット』は1959年にすでに日本で出版されていたが，秋岡記者はチベット解放時期のゲダ活仏とフォードの関係を確認していなかったのである．

阿部治平氏は著書の中で「フォードにしてみればとんだ濡れ衣である．当時からフォードが殺害した

のではないといていたひとはいる。ガポ＝アワンジグメもそのひとりだ」と書いているが、詳しい説明が欠けており真犯人についての言及もない¹⁰²⁾。

その外、A・トム・グルンフェルドが著書*THE MAKING OF MODERN TIBET*(漢語版『現代西藏的誕生』中国蔵学出版社、1990年、日本語版『現代チベットの歩み』東方書店、1994年)の中でゲダの死について触れているが、犯人に関する記述はない¹⁰³⁾。

7. 封印された塑像

図5はゲダと朱徳の親愛の情を視覚化した塑像である。この塑像の主演はゲダ活仏であり、紅軍を率いて後に「建軍の父」と呼ばれた朱徳は脇役にすぎない。台座には江沢民の筆で「一九三六年朱徳会见格達活仏」と彫り込まれている。この塑像が公開された1999年当時、江沢民は党・軍・政府のトップとして各方面に大きな影響力をもっていた。江沢民は朱徳に脇役を演じさせてまでゲダ活仏の中国共産党への功績を讃えたのである。



図5 ゲダ5世(左)と朱徳(右)の塑像

Fig.5 Statues of the 5th Geda (left) and Zhu De (right)

この塑像は現在、活仏の故郷である四川省甘孜県の「朱徳総司令和格達五世紀念館」に飾られている。塑像が公開されたのは1999年であるが、筆者が訪問した2003年8月当時、奇妙なことに紀念館の門はかたく閉ざされていた。管理人の説明によると、鍵は近くに住む活仏の縁者が所持している、見学す

るには甘孜県旅游局の紹介状と縁者の許可が必要ということであった。

管理人の指示どおり手続きを踏むと、なるほど見学は許可された。ただし誰にでも許可されるとは限らず、閉館同然であることは間違いなかった。重いシャッターを上げて中へはいると、案の定、巨大な塑像はほこりをかぶっていた。台座に置かれたチベットの聖なる白い布カタと牛の頭蓋骨が、数奇な人生を送った活仏の魂をひっそりと鎮めていた。

互いに向き合う両者の姿はどこかぎこちなく、強い政治臭を放っているように感じた。ゲダ活仏は目に見えぬ紅い布で共産党としっかり幾重にも結びつけられているようであった。紅い布を結びつけたのはゲダ自身なのか、それとも共産党なのか。ゲダと共産党の関係は不透明なベールで覆われたままである。

この塑像を作る話がもちあがったのは1986年のことである。8月にパンチェン・ラマ10世が甘孜を視察したことで町にも寺院にも活気があふれた。その2ヶ月後に甘孜で開かれた「長征勝利五十周年座談会」(1986年10月18日)の席上で、ゲダ活仏と朱徳の塑像を作る計画が提案された¹⁰⁴⁾。構想から十年余りの歳月をへて、塑像と紀念館が完成したのは1999年であった。制作に携わった四川雕塑芸術院(1987年創設)は、プロパガンダ芸術を担う四川省文化庁直属の機関である。1950年に甘孜チベット族自治州の前身である西康省チベット族自治区が創設されたことから考えると、紀念館と塑像は甘孜州成立50周年記念行事の一環と考えられる。そして江沢民の揮毫には、長征精神の高揚、民族の団結、そして党の統一戦線活動の成果をアピールする意図が込められている。

紀念館の内部にはゲダと紅軍に関する写真やパネルが多数展示されていた。具体的には、「紅軍長征路線図」「紅軍甘孜州路線図」「ボバ共和国中央政府資料」「ボバ甘孜県政府資料」(図6)「ボバ自衛軍資料」「ボバ革命党資料」「紅軍への食糧支援資料」「甘孜老紅軍資料」「甘孜県解放資料」「ゲダ活仏の生涯」(図7)等である。



図6 ボバ政府の展示パネル
Fig.6 Exhibition panels of the Boba Government

活仏の縁者が記念館の一般公開を望まない理由は、共産党が喧伝するゲダ5世が実像とかけ離れているからに相違ない。反論しようにも死人に口はなく、縁者は政治宣伝の塑像を記念館に封じ込めることで、活仏の名誉と誇りを守ろうとしているのである。党や政府にしてみれば、記念館は統一戦線を題材にした愛国主義教育の格好の教材である。にもかかわらず実質閉館を黙認しているのは、縁者や信徒の感情への配慮と言えよう。



図7 ゲダ5世の展示パネル
Fig.7 Exhibition panels of the 5th Geda

ゲダ5世に関しては、遺稿や従者による記録の類が確認（あるいは公表）されていない。ゲダと交わった朱徳や劉伯承をはじめとする軍人も活仏のことを語った形跡がない。共産党や政府が讃える「国を愛し党に尽くした進歩的宗教家」が、本当に活仏の実像なのであろうか。共産党に利用されたあげく、死後意図的に作りあげられた虚像なのであろうか。死後五十数年が経った今、活仏の素顔を知ることが容易でない。

8. ゲダ6世と統一戦線活動

8.1 ゲダ5世生誕100周年座談会

2003年12月25日、四川省成都でゲダ5世生誕100周年を記念した座談会が開かれた。主催は四川省党委員会統一戦線工作部、四川省宗教事務局、党甘孜州委員会、甘孜州人民政府であった。座談会の模様は雑誌『中国西藏』2004年第2期に、劉延東「功烈永垂民族史——紀念五世格達活仏誕辰100周年」の文章が掲載されており、新聞各紙も一斉に報道した。

党や政府の幹部が祝辞の中で強調したのは、ゲダ活仏と中国共産党の「紅い絆」であった。このことは逆に、政治と宗教をめぐってチベットと中国の間に不安定な状況が存在していることを物語っている。甘孜の人々の記憶に刻まれているのは、共産党に尽くした活仏ではなく、慈悲の心で民衆を愛した活仏であるはずだ。

座談会では、ゲダ6世が次のような発言をした¹⁰⁵⁾。

党の指導の下、甘孜県では民族の融和と経済の発展が実現し、信仰の自由が守られた。各民族は一致団結し、チベット独立に反対すべきである。

6世は席上、心の中では5世の後生を願いつつも、顔には「国を愛し党に尽くす進歩的宗教者」という仮面をつけざるを得なかったのである。宗教活動が

党の管理下にある以上、面従腹背も致し方ないことである。仮面の下に隠された苦渋の色が、今の時代を生きる活仏の悲哀を物語っている。

8.2 ゲダ6世訪問

2005年8月24日、筆者はゲダ6世の自宅と白利寺を訪問した。ゲダ6世(図8)は白利寺を預かる責任者であるが、中国政府の方針で現在は「在家活仏」として妻子と甘孜の町で暮らしてきた。これまでゲダ6世の詳しい履歴は公表されていないが、「在家活仏」という境遇は建国後に活仏が歩んだ苦難の道を表している。以下は活仏へのインタビューを整理したものである。



図8 ゲダ6世
Fig.8 The 6th Geda

ゲダ6世は1952年四川省甘孜県の生まれ。夫人・長男(僧侶)・長女(学生)の4大家族であった。4歳でゲダ6世に認定され白利寺に入ったが、7歳の時、民主改革運動が激しくなり、寺院から切り離されて甘孜の町へ連れてこられた。当時は政治の動向と宗教の関係を理解することはできず、言われるままに寺を追われた。甘孜に来てから強制労働に従事することはなく、もっぱらチベット語・漢語・数学等の学習を行った。文化大革命時期の生活については、今はまだ語ることはできない。文革終結後、甘孜県政治協商会議の副主席に任命され、県の統一戦線活動の指導者として職責を果たしてきた。インタビューの中で、「現在、甘孜の宗教活動は活発であ

り、チベット仏教は民族団結と祖国統一に貢献している。ゲダ5世は中国共産党を熱愛した優れた高僧であり、その功績は永く党と民族の歴史に残る」と語った。

「文革期を語ることはできない」という言葉は、「在家」と「妻帯」に至った経緯に触れたくないという意味に解釈できる。「在家」も「妻帯」も活仏本人の意思ではなく、時の政治情勢が生み出した悲劇である。白利寺を中心とした周辺地域に強い影響力を持つ活仏を寺院から切り離し還俗と妻帯を強制することで、活仏の影響力と信徒の信仰心を弱めることが政府の狙いであった。命令に逆らえば反革命のレッテルを貼られ、自分だけではなく周囲の多数の僧侶にも還俗や強制労働という虐待が加えられることは必至であった。訪問した2005年当時、中央統戦部の意向でゲダ5世の顕彰活動が盛んに行われていたという事情もあり、6世は政治的に敏感な問題については発言を控えざるを得なかったに違いない。筆者は6世宅を訪問する際、文革中の白利寺の状況と6世の境遇について質問したいと考えていたが、夫人が一週間前に急逝されたことを事前に聞いていたため、過去の痛みに触れることはできなかった。

政府が活仏に与えた政治協商会議の職務は、中華民族の団結と党の宗教政策を宣伝する重要な役目である。チベットや漢という個別の民族を包括した中華民族という概念は、実際は漢族を中心とした極めて政治色の強いものであり、チベット人が中華民族の一員というアイデンティティーを持つことは難しく、むしろ反発する気持ちの方が強いといえる。そこで、地域の活仏を統一戦線活動の代表者にすることで、民族紛争・宗教紛争の発生を未然に防ぎたいという政府の思惑も見え隠れしている。在家を余儀なくされているゲダ6世であるが、甘孜の信徒たちが今も活仏を敬い慕う気持ちに変わりはない。

9. ゲダ活仏と統一戦線

9.1 ゲダ5世と中国共産党

2000年11月、甘孜チベット族自治州は成立50周年を迎えた。『中国西藏』2000年第4期は成立50周年特集を組み、中国共産党が推進した民族区域自治政策・統一戦線活動・宗教政策・経済活動の成果を誉め讃えた¹⁰⁶⁾。掲載された記念館の開館式典の写真(図9)を見ると、正面玄関の上部に毛沢東の肖像画が設置され、チベットの聖なる布カタが添えられている。2000年という時期に、しかもチベット人居住区に新たに毛沢東の肖像画が設置されることは極めて異例である。2003年筆者が見学した際、肖像画はすでに撤去されていた。先に触れたように、記念館の展示内容は紅軍長征とチベット解放をテーマとした政治的軍事的色彩の濃いものである。そこにチベット進攻を指示した毛沢東を飾ることは、チベット人の神経を逆なでする行為である。記念館に鎮座するゲダ活仏像は、あくまでも党の政策を讃美するための飾りに過ぎないのである。



図9 記念館開館の祝賀会

Fig.9 The opening ceremony of the 5th Geda Memorial Hall

ゲダ5世をめぐる最大の謎は、やはり共産党との関係である。つまり、自ら共産党の懐に飛び込んでいったのか、それとも政治的に利用するために引きずり込まれたのかという点だ。共産党は活仏の党と軍に対する献身的な協力を誉め讃えているが、その

ことを十分に裏付けるだけの資料や証言は少ない。党が伝える「愛国活仏」像には相当な誇張が含まれていることは間違いない。

ジャムダ(江達)瓦拉寺(瓦熱寺)の僧侶瓦熱夏仲・阿旺土旦が1950年当時の様子を語った文章がある(1984年12月)。そこに登場するゲダ5世はやはり党が宣伝する「愛国活仏」であり、ゲダ事件に関しても、「1950年6月(チベット暦・川田注)、イギリスのスパイであるフォードがゲダ活仏を毒殺した」と語っている¹⁰⁷⁾。瓦熱夏仲・阿旺土旦は1950年に甘孜で行われたゲダ追悼集会に参加した。集会はゲダへの哀悼を捧げつつも、ゲダの愛党愛国精神を模範に、解放軍のチベット進軍への奉仕を呼びかける内容であった。その後、地元のチベット人は進軍を支える武器や食糧の輸送に駆り出された。僧侶による証言も公表された内容を見れば、党の意向を代弁したものであることがわかる。

金沙江から東側のいわゆる東チベットは、政治面ではダライ・ラマの統治を受けることなく、経済面では四川の漢人社会とつながりが強い地域である。隊商が行き交う道沿いにチベット人と漢人が混住しているため、漢人の中にはチベット語を解しチベット仏教を信仰する者も少なからずいる。財力のある漢人信徒からの布施が、大きな収入源となる寺院もある。20世紀前半、東チベットの寺院は軍閥や国民党との関係が良好とは言えなかった。高僧や土司の中には国民党と手を結び、経済活動や納税を通じて利権をむさぼる者もいた。ゲダ5世は紅軍の民族政策・宗教政策に触れるなかで、軍閥と国民党との違いを敏感に感じた結果食糧支援に踏み切ったのである。紅軍を助けることは、長征の途上食い扶持を求めて入隊した若いチベット人兵士を助けることにもなった。ゲダは寺院を運営し地域と信徒を束ねる指導者として現実的な対応をとったのであり、共産党への盲目的な追従ではなかった。

筆者はゲダが紅軍と朱徳を信頼した理由の一つが諾那活仏への対応にあると考える¹⁰⁸⁾。諾那活仏は

リウォチェ(類烏齊)金塘喇嘛の転生ラマであり、国民党と組み甘孜を目指す紅軍に武力攻撃を加えてきたことは先に紹介した通りである。朱徳はカム(東チベット)で大きな影響力をもつ諾那活仏を共産党側に取り込むことに力を注ぎ、側近の陳昌浩にその任務を命じた。諾那は次第に共産党の政策に理解を示し協力関係を結ぶかに思われたが、1936年5月12日に急逝してしまった(享年73)。彼は臨終際に「遺体を三日間動かさない、火葬する、遺骨を廬山に納める」という遺言を残した。朱徳は遺言に従うよう指示を出し丁寧に葬った。そして活仏の従者に紅軍の軍服と路銀と馬、さらに護衛兵を付けて、遺骨を廬山へ運ばせた¹⁰⁹⁾。そのことを知ったカムのチベット人は朱徳と紅軍へ感謝の意を表したと伝えられている。朱徳の諾那への対応がゲダ活仏の共産党への信頼を育んだと筆者は考える。

一方、先に見たように、毛沢東の指示を受けた朱徳、劉伯承、天宝といった軍の側近が、活仏を共産党の使者としてチベット解放に利用したことは明らかである。しかし、ダライ・ラマへの説得工作と和平交渉にゲダ5世がどの程度活積極的に関わっていたかは定かではない。和平交渉は共産党の軍事政策の一環であり、交渉が暗礁に乗り上げた場合、解放軍が進攻し武力衝突が始まることはすでに想定されていた。当時の事情を最もよく知っている人物は天宝である。共産党の軍事目的を達成するためにゲダ5世を説き伏せた天宝は有能な策士であり、朱徳の懐刀と言えよう。チベット解放後、四川省やチベット自治区の要職を歴任し党のチベット政策に辣腕を振るったが、ゲダ5世とチベット解放の真相を語ることはなかった。

9.2 「愛国活仏」への道

1950年12月3日の新華社電は、ゲダ5世を紅軍を助けチベット解放に献身した活仏と報じているが、中華民族の英雄と見なしているわけではない。1950年代末の民主改革運動から文革時期の間も英雄として

扱われることはなかった。筆者が調べた限りでは、ゲダ5世の詳しい履歴が調査され、愛国宗教人士としての事績の原型が作られたのは1980年である。この年は甘孜チベット族自治州成立30周年にあたる節目の年であり、ゲダ5世圓寂の3ヶ月後に、前身の西康省チベット族自治区が誕生した。州政府は祝賀活動と統一戦線活動の一環として、圓寂から同じく30年目を迎えたゲダ5世に着目した。ゲダ5世の英雄伝は「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」にまとめられた¹¹⁰⁾。

ゲダ活仏は共産党を熱愛し、社会主義の祖国を熱愛し、我が身をもって祖国統一と民族団結のために勇ましく献身した革命功績は、祖国の人民とりわけチベット人民の思想に深く刻まれている。彼はチベット人民や宗教界の傑出した愛国人士と呼ぶにふさわしい。我々は彼に深い懐旧の情を表わす。祖国の人民も永久に彼を慕い懐かしむことである。

この文章は四川省統一戦線工作部に注目され、四川省哲学社会科学研究部門の優秀賞を受けた。それ以後、四川省では中華民族の英雄としてゲダ5世が統一戦線活動に登場する回数が増えるにつれて、この英雄伝は広く流布し始めた。「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」の資料整理にあたったのは政府系のチベット人学者テンドゥ・ラモ(鄧珠拉姆)である。彼女は後に甘孜州50周年を目前にした1999年、英雄ゲダ5世の生涯をわかりやすく絵本にまとめ、愛国主義教育の教科書とした(『格達活仏』四川民族出版社、1999年)。

この英雄伝のゲダ5世像はあくまでも中国共産党の視点から描かれたものであり、その生涯は虚々実々の皮膜に覆われており、虚と実の峻別は極めて困難である。2003年8月と2005年8月に筆者が四川省甘孜県でチベット人10人に行った聞き取り調査では、7人からゲダ5世は「愛党愛国の活仏だ」という

「模範的な」回答を得た。残り3人は「武力進攻という目的のために、中国側が秘かに暗殺を実行した」「活仏の死は政治的に利用されている」「ゲダ6世も時の政治が生んだ悲劇の活仏だ」と答えた。ゲダ5世の英雄像は必ずしも現在の住民に受け入れられているとは言い難い。「愛国活仏」とは、「中華民族を団結させる凝集力をもち、祖国統一と中華振興に貢献する活仏」と言い換えることもできる。筆者はゲダ5世という「愛国活仏」は中国共産党によって作られ利用された「英雄」であり、実像より虚像の要素が勝っていると考える。

9.3 テレビドラマ「格達活仏」

中国では、「英雄」は党や軍の要請に応じて作られるものである。2005年12月、中央電視台は「格達活仏」という連続ドラマ全20集を放映した。この作品はチベット自治区成立40周年(2005年)、そして紅軍長征勝利70周年(2006年)を記念した大型企画であり、中国共産党が数年前から周到な準備を重ねてきた自信作である。中央統戦部から見たゲダ5世は、紅軍長征とチベット解放に尽力した点で二つの祝賀を飾るにふさわしい「英雄」であった。チベットの民衆と紅軍兵士を救い、御仏と中国共産党に仕えたその生涯は、中国共産党によるチベット政策と統一戦線活動の成果を訴える内容であった。

「民族団結」「祖国統一」「愛国主義」といった重いテーマをいくつも掲げたこの作品は、「文芸は政治に奉仕する」という中国がこれまで得意としてきた様式を踏まえたものである。近年、中国のテレビ番組は大衆の娯楽として急速に多様化の道を歩み始めたが、その一方で、政府が独裁を維持するための有効な装置でもあり続けている。ドラマを企画制作したのは中国共産党中央の直屬機関・統一戦線工作部(略称中央統戦部)である。制作の過程で中央統戦部長の劉延東自ら何度も重要な指示を出した¹¹¹⁾。

チベットを題材にしたテレビドラマといえば、「雪震」「拉薩往事」「文成公主」「西藏風雲」「塵埃

落定」など多数あるが、「格達活仏」の特徴は中国のテレビドラマ史上初めてチベット仏教の高僧を主人公に設定したことだ。ただし、この作品は宗教活動を扱ったものではなく、あくまでもゲダ5世の政治的軍事的貢献を中国共産党の視点から描いたものである。放映終了直後、北京では作品のDVDが早々に売り切れとなった¹¹²⁾。「中国共産党に忠誠を誓ったチベット仏教の活仏」という政治色の強い人物設定には、中国人の多くが違和感を抱き、党や軍の宣伝を目的としたドラマは不評に違いないと思われたが、意外にも北京での前評判は上々であった。一方、チベット人からは「活仏は共産党の宗教政策を妄信している」「民族の団結を強引に押しつけている」という不満の声もネット上に続出した。

中央統戦部がテレビ局を通じて作品制作を依頼したのは、脚本家の黄志龍と監督の楊韜であった。チベットを題材にした映画やテレビドラマの業界では、二人とも重鎮である。特に黄志龍はチベット自治区話劇団に設立当初から40年近く在籍した筋金入りの文芸幹部である。政治と民族の軋轢、政治と宗教の衝突をラサで直接肌で感じ取ってきただけに、チベットを扱う作品の醍醐味と難しさを誰よりも知っている。テレビドラマでは「拉薩往事」や「西藏風雲」の脚本を手がけ、党のチベット政策や統一戦線を見事に描いたその手腕は、政府関係者から高い評価を得た。自治区党委員会宣伝部で文芸処長を兼任した経歴が示すとおり、中国政府が信頼を寄せている脚本家の一人である¹¹³⁾。

楊韜はチベットを描いたテレビドラマ「雪震」と「拉薩往事」の監督を務めたことで有名である。楊韜監督は中央統戦部からの依頼に応えようと、これまで以上に配役に力を注いだ。このドラマが巷で話題となった理由は、都市部の富裕層の間でチベット観光やチベット仏教への関心が高まりを見せていることと、抜群の演技力を持つチベット人大物俳優トプギエル(多布杰)を活仏役に抜擢したことにある¹¹⁴⁾。トプギエルは映画「可可西里」(「ココシリ」、

2003年制作、監督陸川)で、チベットカモシカの密猟者を取り締まる山岳パトロール隊の隊長役を熱演し、内外で好評を博したことは記憶に新しい。勇猛果敢に犯人を追いつめていく演技はトプギェルに新たな魅力をつけ加え、名実ともにトップスターの座に押し上げた。中国のテレビドラマでは、チベット人役も中国人(漢人)が演じることが多かったが、「格達活仏」ではチベット人役はすべてチベット人が演じることにこだわり、裏方も専門知識を持ったチベット人を採用した。また、重要な登場人物である朱徳役には王伍福、毛沢東役には王震、周恩来役には孔祥玉といった領袖役を専門とする大物俳優を揃えて、政治舞台の華やかさも演出した。

黄志龍と楊韜は、ゲダ5世の人物像を際立たせる目的で悪役ロンカム(隆康)活仏との対比という構図を設定した。ロンカムは実在の諾那活仏を意識した人物設定である。ドラマは中国共産党との関係を描く上で五つの見せ場を設けた¹¹⁵⁾。

- (1)紅軍と朱徳との出会い
- (2)ボバ人民共和国の誕生
- (3)紅軍兵士の救出
- (4)中華人民共和国の誕生
- (5)チベット解放の使者

ドラマでは(5)の中で、「1950年8月22日 ゲダ活仏殺害され圓寂」の字幕が出る。作品中にはフォードが無線所内でゲダにコーヒーを出す場面がある(図10)。ゲダの容態が悪化した後、フォードは薬を飲むように勧めるが、ゲダは断った。ゲダは殺害されたが、犯人が誰であるかは特定されていない。フォードの関与を思わせる作りにはなっているが、描写は曖昧さを残している。中国共産党はあくまでも「殺害に関与した」というフォードの自白(1951年-1952年)と裁判の結果を重視する一方、後にフォードが回顧録で示した「無実」の主張に対して一切反論をしていない。



図10 チャムド通信所内のフォード(左)とゲダ5世(右)

Fig.10 Ford (left) and the 5th Geda (right) in the Changdu radio station

2005年9月1日、ラサのポタラ宮前の広場で、自治区成立40周年の祝賀大会が盛大に開催された。中央政府の代表団を率いてラサ入りしたのは、統一戦線活動の要である中国人民政治協商会議主席賈慶林であった(政治局常務委員、党内序列第4位)。大会の席上、賈主席は「民族団結の強化」と「祖国統一の維持」を強調しつつ祝辞を述べた(賈慶林「在西藏自治区成立四十周年慶祝大会上的講話」)¹¹⁶⁾。自治区の党機関紙『西藏日報』は56頁にも及ぶ大特集号を組み(通常4頁)、毛沢東から胡錦濤にいたる党指導者が行ったチベット政策の成果を誉め讃えた。

ドラマは当初40周年の祝賀行事にあわせて、9月の放映開始を目指していた。3月から7月にかけて3000メートルを超す高地で撮影を敢行し、8月に北京での編集作業が終了した。そして9月の放映を前に、中央電視台の関係者・チベット学研究者・党幹部等が集まり、構成から音楽、せりふの細部に到るまで入念にチェックを行った。

かつての先遣部隊参謀・王貴(軍事科学院研究員)のように、チベット進軍の過程でゲダ5世を直接知る者もいるし、北京の中央民族大学教員喜饒尼瑪は、時代考証や風俗習慣に関して小さな妥協も許さなかった¹¹⁷⁾。制作の総顧問を務めたゲダ6世は、白利寺を撮影隊に開放して最大限の便宜をはかった。そして6世の意向も可能な限り作品に反映させた。

このようにして党と軍の意向に沿うように、徹底的に修正を重ねていったのである。

祝賀大会終了後の9月6日と7日に、ラサでは自治区の党・軍・政府の幹部及び党史研究室や社会科学院の研究員等を集めて、「格達活仏」の内部公開が行われた¹¹⁸⁾。報道によると、幹部たちはこぞって「『格達活仏』は民族団結と祖国統一をテーマに掲げた愛国主義の傑作である」と絶賛したが、意外にも9月に予定していた放映は12月に延期となった¹¹⁹⁾。理由は公表されていないが、政治的に敏感な題材を扱ったドラマだけに、作品構成や事実関係について党や軍の幹部から修正要求が出され、調整に手間取ったと考えるのが自然であろう。過去にトプギェルが初出演したテレビドラマ「布達拉宮秘史」(1988年)は放映されることなくお蔵入りとなった。20世紀のチベットを扱った作品が、中国共産党の政治的立場とチベット亡命政府へのメッセージの両方を含んでいるためである¹²⁰⁾。

テレビドラマでは「西藏風雲」(全25集)にもゲダ5世が登場している¹²¹⁾。1999年に中央電視台とチベット自治区党委員会宣伝部が共同で制作し、中国共産党の視点からチベット政策の成果を描いた作品である。監督は翟俊杰、脚本は黄志龍他、18軍先遣部隊にいた王貴が軍事顧問を務めた。第6集にゲダ活仏がチベット解放の使者としてラサを目指す場面がある。チャムドでラル長官の妨害を受け1ヶ月余り足止めされた際、ゲダは「解放軍の進攻までは1ヶ月半の猶予しかない」と語った。チベット政府との和平協議の結果に関わらず、チベット占領を目的とした進軍は毛沢東の既定方針であった。殺害事件については、ドラマにフォードは登場するがフォードが殺害に関与したとは描かれていない。「格達活仏」同様、ゲダの死因については曖昧さを含んだ描写となっている。

9.4 ゲダ5世と愛国主義

「ゲダ5世に学び、祖国と宗教を愛するりっぱな僧尼になろう！」これは2004年に四川省内のチベット仏教寺院で行われた、愛国主義教育のスローガンである¹²²⁾。この場合の愛国主義には、チベットを中華民族の一員として団結させチベット亡命政府による分裂主義を批判する意図が込められている。四川省党委員会統戦部と四川省政府宗教局が積極的に運動を推進した背後には、ゲダ5世生誕100周年(2003年)の祝賀とテレビドラマ「格達活仏」(2005年)の宣伝活動があった。

この「ゲダ5世に学べ」運動のキーワードは「民族団結」と「祖国統一」であり、テレビドラマのテーマと一致している。2005年になれば、ドラマのロケがカンゼ州の各地で行われ、中央や四川省の幹部も次々と視察に訪れることになっている。その前に四川省統戦部はこの運動を積極的に展開することで、省内の統一戦線活動を活発化させ中央統戦部との連携をはかる必要があった。なかでも活仏の出身地であるカンゼ県では、次のような活動が行われた¹²³⁾。

- (1)チベット仏教各寺院に「ゲダ5世に学べ」運動を指導する組織を作らせた。
- (2)党中央統戦部部長・劉延東の講話「功績は民族の歴史に永遠に残る」等をチベット語に翻訳し、カンゼ州内の寺院に配布した。講話は「ゲダ5世生誕100周年記念座談会」(2003年12月成都で開催)で発表されたものである¹²⁴⁾。
- (3)カンゼ県党委員会はテレビ番組「蔵漢両民族団結の模範」を制作し、放送を通じて啓蒙活動を行なった(筆者未見)。
- (4)朱徳総司令ゲダ5世記念館や白利寺を活用して、僧尼に愛国主義教育を実施した。

こうした政治思想教育を積極的に行なう背景には、若い僧尼は愛国主義教育を受ける機会も少なく、ゲダ5世と中国共産党の関係を知らない者が多数いるという事情もある。

10. 結論

ゲダ5世は中国共産党によって見いだされ、チベット政策を中心とした統一戦線活動に利用された「英雄」である。紅軍長征とチベット解放に献身した英雄像の原型は、ゲダ5世の死後、中国人民解放軍がチベットへ進攻する過程で軍の調査に基づき形作られた。その後、1980年四川省甘孜(カンゼ)チベット族自治州成立30周年を契機に、チベット人学者テンドゥ・ラモ(鄧珠拉姆)等が中心となりゲダ5世の履歴調査が行われて英雄像の骨格に肉付けがなされた。そして2000年のカンゼ州成立50周年記念事業の一環として、ゲダの故郷に「朱徳総司令和格達五世紀念館」が開設され、朱徳とゲダ5世の塑像が設置された。2003年、四川省党委員会統一戦線工作部が中心となり、ゲダ5世生誕100周年記念座談会が成都で開催された。ゲダ5世は中国共産党のチベット政策に尽力した「愛国活仏」であり、その統一戦線活動の成果をゲダ6世が引き継ぐことが確認された。2005年、党中央統戦部はチベット自治区成立40周年及び翌年の紅軍長征勝利70周年(2006年)を記念して、ゲダ5世の生涯を党と軍の視点から描いたテレビドラマ「格達活仏」を制作し全国放映した。このことは今後中国共産党がチベット政策・統一戦線活動を推進していく上で、ゲダ5世に「民族団結」と「祖国統一」に尽力した愛国宗教人士という役割を担わせることを意味している。中国共産党のチベット政策・統一戦線活動の動向を読み解く上で、「ゲダ5世に学ぶ」キャンペーンは重要な鍵となるはずである。

【注】

- 1) 「格達活仏」, 藍宇翔・周錫銀主編『四川少数民族紅軍伝』四川人民出版社, 1996年, 281頁。
- 2) 「格達」, 鄭広瑾『長征事典』河南人民出版社, 1996年, 454頁。

- 3) 「格達」, 曾国慶・郭衛平編著『歴代蔵族名人伝』西藏人民出版社, 1996年, 359頁。
- 4) 川田進「活仏と共産党を結ぶ『紅い』絆 - - 格達五世と朱徳」『火鍋子』61号(2004年3月), 翠書房。川田進「電視劇『格達活仏』に見る虚々実々の英雄像 - - 白利寺ゲダ五世の死と再生」『火鍋子』68号(2006年10月), 翠書房。
- 5) 「転生ラマ」「トゥルク」「活仏」の用語に関しては、田中公明『活仏たちのチベット - - ダライ・ラマとカルマパ』(春秋社, 2000年), 石濱裕美子「転生する高僧たち」『チベットを知るための50章』(明石書店, 2004年)を参照した。
- 6) 『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 11頁。
- 7) 『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 277頁。
- 8) 格勒『甘孜蔵族自治州史話』四川民族出版社, 1984年, 269頁。
- 9) 「格達活仏怎樣成為紅軍真誠的朋友?」
<http://www.ynet.com/view.jsp?oid=16133607>
[2007.5.2]
- 10) 毛沢東「論反对日本帝国主義的策略」(1935年12月27日), 『毛沢東選集』第1巻, 人民出版社, 1991年, 149 - 150頁。
- 11) 「中国工農紅軍四方面軍在西北地区行動的標語口号」(摘録), 中共中央統戦部『民族問題文献彙編』中共中央党校出版社, 1991年, 497 - 498頁。
- 12) 文化部党史資料徵集工作委員会弁公室『長征中的文化工作』北京図書館出版社, 1998年, 125 - 155頁。
- 13) 「中国工農紅軍四方面軍在西北地区行動的標語口号」(摘録)中共中央統戦部『民族問題文献彙編』中共中央党校出版社, 1991年, 497 - 498頁。
- 14) 文化部党史資料徵集工作委員会弁公室『長征中

- 的文化工作』北京図書館出版社，
1998年，205頁。
- 15) 文化部党史資料徵集工作委員會辦公室『長征中的文化工作』北京図書館出版社，
1998年，133 - 134頁。
- 16) 王超耀『雪山草地紅軍人物』西南交通大学出版社，1998年，22 - 24頁。
- 17) 軍事科学院軍事歷史研究所『中国工農紅軍長征全史(三)紅四方面軍征戰記』軍事科学出版社，2006年，175頁。
- 18) 曉浩「我所知道的格達活仏和甘孜白利寺」(2005年12月8日)，「新華網山東頻道」
http://sd.xinhuanet.com/life/2005-12/08/content_5769403.htm [2006.6.1]
- 19) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，437頁。
- 20) 曉浩「我所知道的格達活仏和甘孜白利寺」(2005年12月8日)「新華網山東頻道」
http://sd.xinhuanet.com/life/2005-12/08/content_5769403.htm [2006.6.1]
- 21) 中共中央党史研究室第一研究部編著『紅軍長征史』遼寧人民出版社，1996年，506頁。
- 22) 中共中央党史研究室第一研究部編著『紅軍長征史』遼寧人民出版社，1996年，507頁。
- 23) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，11頁。
- 24) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，259頁。
- 25) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，259頁。
- 26) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，278頁。
- 27) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，441頁。
- 28) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，258頁。
- 29) 「波巴第一次全国人民代表大会宣言(摘録)」(1936年5月)，中共中央統戰部『民族問題文献彙編』中共中央党校出版社，1991年，496頁。
- 30) 「波巴第一次全国人民代表大会宣言(摘録)」(1936年5月)，中共中央統戰部『民族問題文献彙編』中共中央党校出版社，1991年，496頁。
- 31) 「中国工農紅軍第四方面軍總政治部对番民的策略路線的提綱(供党小組討論用)」(1936年5月29日)，中共中央統戰部『民族問題文献彙編』中共中央党校出版社，1991年，369 - 376頁。
- 32) 「中華蘇維埃共和国西北聯邦政府成立宣言」(1935年5月30日)，盛仁学編『張国燾問題研究資料』四川人民出版社，1982年，451頁。
- 33) 「中共中央政治局关于目前戰略方針之補充決定」(1935年8月20日)，中共中央統戰部『民族問題文献彙編』中共中央党校出版社，1991年，312頁。
- 34) 「中華蘇維埃運動發展的前途和我們当前任務」(1936年4月1日)，盛仁学編『張国燾問題研究資料』四川人民出版社，1982年，549頁。
- 35) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，258頁。
- 36) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，11頁。
- 37) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，11頁。
- 38) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，
1999年，11頁。
- 39) 松本ますみ『中国民族政策の研究 - - 清末から1945年までの「民族論」を中心に』多賀出版，1999年，208頁。
- 40) 「中共中央政治局关于張国燾錯誤的決定」(1937年3月31日)，盛仁学編『張国燾問題研究資料』四川人民出版社，1982年，7 - 11頁。
- 41) 「紅軍長征時期建立的藏族人民政權 - - 博巴自治政府」，周錫銀『紅軍長征時期党的民族政策』四川民族出版社，1985年，51 - 66頁。
- 42) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，

- 1999年, 437頁.
- 43) 来作中「為西藏和平解放獻身的甘孜格達活仏」, 中国人民政治協商会議四川省甘孜藏族自治州委員会編『四川省甘孜藏族自治州文史資料選輯』第2輯, 1984年6月, 13頁.
- 44) 中共甘孜州委党史研究室編『甘孜州歷史大事記』2004年10月, 5頁.
- 45) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 32頁.『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 14頁.
- 46) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 32頁.『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 15頁.
- 47) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 34頁.
- 48) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 32頁.『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 39 - 40頁.
- 49) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 35 - 41頁.
- 50) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 32頁.『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 43頁.
- 51) 長征時期の吳忠については「吳忠同志生平簡介」, 陳勇進「紅軍一少年」(『吳忠追懷録』広東人民出版社, 1993年)に詳しい.『十八軍先遣偵察科進藏紀実』には天宝も長征時期に甘孜に来たと書いているが, 詳細は不明である(43頁).
- 52) 暁浩『西藏, 1951年』民族出版社, 1999年, 70 - 76頁.
- 53) 王超耀『雪山草地紅軍人物』西南交通大学出版社, 1998年, 22 - 24頁.周錫銀「天宝」, 藍宇翔・周錫銀主編『四川少数民族紅軍伝』四川人民出版社, 1996年, 56-66頁.
「紅軍長征途中曾經建立的兩個“共和国”」
<http://hi.baidu.com/mxh138/blog/item/eed012302b882898a8018ef3.html> [2007.5.10]
- 54) 「朱德劉伯承給格達的復電」(1950年6月1日)注1によると, 1950年5月6日, ゲダより朱徳ヘダライ・ラマ工作に関する電報が送られたとある(『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 80頁).
- 55) 「西南局關於解放西藏的方針, 政策向中央的請示(節録)」(1950年5月11日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 75頁.
- 56) 「中央復西南局有關西藏問題的電報(節録)」(1950年5月17日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 77 - 78頁.
- 57) ゲダ活仏から朱徳に宛てた書簡は『十八軍先遣偵察科進藏紀実』44 - 45頁に引用されているが, 全体ではなく一部のみである.
- 58) 「朱德劉伯承給格達的復電」(1950年6月1日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 80頁.
- 59) 「西南局關於十項条件為和平談判及進軍基礎給西藏工委的指示」(1950年6月2日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 81頁.
- 60) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 45頁.
- 61) 郝桂堯『曙光從東方升起 - - 昌都戰役与和平解放西藏紀実』四川民族出版社, 2000年, 105 - 113頁.
- 62) 来作中「為西藏和平解放獻身的甘孜格達活仏」(中国人民政治協商会議四川省甘孜藏族自治州委員会編『四川省甘孜藏族自治州文史資料選輯』第2輯, 1984年6月, 15頁)及び暁浩『西藏, 1951年 - - 人民解放軍進藏実録』民族出版社, 1999年, 74頁)は7月4日としている. 中共西藏自治区委員会党史研究室編著『中国共产党西藏歷史大事記1949 - 2004』第1卷(中共党史出版社, 2005年, 21頁)は7月10日としている.
- 63) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 61頁.

- 64) 晁浩『西藏, 1951年 - - 人民解放軍進蔵実録』民族出版社, 1999年, 74頁.
- 65) 来作中「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」(中国人民政治協商会議四川省甘孜藏族自治州委員会編『四川省甘孜藏族自治州文史資料選輯』第2輯, 1984年6月, 16頁)は8月5日着としているが, 他の資料では7月24日となっている.
- 66) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 62頁.
- 67) 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族及本人経歴』西藏自治区政協文史資料研究委員会, 民族出版社, 1995年, 111頁.
- 68) 郝桂堯『曙光從東方昇起 - - 昌都戦役与和平解放西藏紀実』四川民族出版社, 2000年, 114頁. 三つの条件については, 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族及本人経歴』(西藏自治区政協文史資料研究委員会, 民族出版社, 1995年, 112頁)にも記載がある.
- 69) 晁浩『西藏, 1951年 - - 人民解放軍進蔵実録』民族出版社, 1999年, 74 - 75頁.
- 70) 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族及本人経歴』西藏自治区政協文史資料研究委員会, 民族出版社, 1995年, 113頁.
- 71) 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族及本人経歴』西藏自治区政協文史資料研究委員会, 民族出版社, 1995年, 111頁.
- 72) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 62 - 63頁.
- 73) 『甘孜県志』四川科学技術出版社, 1999年, 438頁.
- 74) 「西南軍区昌都戦役の基本命令」(1950年8月26日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 81頁. 中共西藏自治区委員会党史研究室編著『中国共産党西藏歴史大事記1949 - 2004』第1巻, 中共党史出版社, 2005年, 21頁, 24頁.
- 75) 平野聡「『解放』とは何か - - 『チベット解放』からみた一考察」, 『中国』第16号, 中国社会文化学会, 2001年6月, 317頁.
- 76) 平野聡「『解放』とは何か - - 『チベット解放』からみた一考察」, 『中国』第16号, 中国社会文化学会, 2001年6月, 323 - 324頁.
- 77) 「毛沢東關於由西南局籌劃進軍及經營西藏問題的電報」(1950年1月2日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 47頁.
- 78) 「毛沢東關於進軍和經營西藏問題的電報」(1950年1月10日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 51頁.
- 79) 晁浩『西藏, 1951年 - - 人民解放軍進蔵実録』民族出版社, 1999年, 7頁.
- 80) 「毛沢東關於解放西藏問題給彭德懷的電報」(1949年11月23日), 『和平解放西藏』西藏人民出版社, 1995年, 46頁.
- 81) 「西南軍政委員会委員格達慘遭英帝特務分子毒害身死」(1950年12月3日新華社), 『有關西藏問題的文件和材料選集(国内部分, 1949 - 1959)』新華社通訊編印, 1959年6月, 140頁.
- 82) 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族及本人経歴』西藏自治区政協文史資料研究委員会, 民族出版社, 1995年, 107頁.
- 83) 周德倉『西藏新聞傳播史』中央民族大学出版社, 2005年, 118 - 125頁.
- 84) 周德倉『西藏新聞傳播史』中央民族大学出版社, 2005年, 123頁.
- 85) 張小平『民族宣伝散論』中国蔵学出版社, 2005年, 99 - 103頁, 314頁. 『毛沢東西蔵工作文選』中央文献出版社・中国蔵学出版社, 2001年, 14頁.
- 86) 「西南軍政委員会委員格達慘遭英帝特務分子毒害身死」(1950年12月3日新華社), 『有關西藏問題的文件和材料選集(国内部分, 1949 - 1959)』新華社通訊編印, 1959年6月, 140 - 141頁.
- 87) 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族

- 及本人経歴』西藏自治区政協文史資料研究委員会，民族出版社，1995年，114頁。
- 88) 拉魯・次旺多吉『西藏文史資料選輯16拉魯家族及本人経歴』西藏自治区政協文史資料研究委員会，民族出版社，1995年，158頁。
- 89) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，97頁。
- 90) Robert Ford, *Captured in Tibet*, GEORGE G. HARRAP CO. LTD, 1957, 139頁。
- 91) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，97頁。
- 92) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，97頁。
- 93) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，98頁。
- 94) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，95 - 96頁。
- 95) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，96頁。
- 96) 王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進藏紀実』中国蔵学出版社，2001年，96頁。
- 97) Robert Ford, *Captured in Tibet*, GEORGE G. HARRAP CO. LTD, 1957, 219 - 220頁。
- 98) 王貴・喜饒尼瑪・唐家衛『西藏歴史地位辨』民族出版社，1995年，416 - 417頁。
- 99) 王貴・喜饒尼瑪・唐家衛『西藏歴史地位辨』民族出版社，1995年，417頁。
- 100) Robert Ford, *Captured in Tibet*, GEORGE G. HARRAP CO. LTD, 1957, 240頁。
- 101) 秋岡家栄『チベットの旅』佼成出版社，1977年，142 - 143頁。
- 102) 阿部治平『もうひとつのチベット現代史 - - プンツォク = ワンゲルの夢と革命の生涯』明石書店，2006年，167頁。
- 103) 『現代西藏的誕生』中国蔵学出版社，1990年，161頁。
- 104) 『甘孜県志』四川科学技術出版社，1999年，27頁。
- 105) 中共中央統一戦線工作部「紀念五世格達活仏誕辰100周年座談会在蓉召開」
<http://www.zyztb.org.cn/zyztbwz/religion/xxdl/80200312170625.htm> [2004.1.9]
- 106) 「甘孜蔵族自治州建州50周年専号」『中国西藏』2000年第4号，3 - 41頁。
- 107) 瓦熱夏仲・阿旺土旦「憶白若・格達活仏生平片段」，西藏自治区政協文史資料研究委員会編『西藏文史資料選輯』第6輯，1985年6月，74 - 78頁。
- 108) 「團結上層宗教界人士 - - 朱德善待諾那活仏」，「中共中央統一戦線工作部」
<http://www.zyztb.org.cn/zyztbwz/theory/shili/weizheng/80200212170127.htm> [2007.5.2]
- 109) 「諾那与紅軍」
<http://www.peacehall.com/forum/zongjiao2/18990.shtml> [2007.5.2]
- 110) 来作中「為西藏和平解放献身的甘孜格達活仏」，中国人民政治協商會議四川省甘孜蔵族自治州委員会編『四川省甘孜蔵族自治州文史資料選輯』第2輯，1984年6月，17頁。
- 111) 「組図：大手筆譜写西藏風雲多布吉演一代活仏」(2005年7月8日)
<http://ent.sina.com.cn/v/m/2005-07-08/1806774539.html> [2006.6.1]
- 112) DVD『格達活仏』北京電視芸術中心音像出版社，2005年11月，主演：多布杰，監督：楊韜，総顧問：6世格達活仏。2005年12月，筆者が北京で販売状況を確認した。
- 113) 「『格達活仏』幕後花絮：王伍福与康克清相遇」(2005.12.5)
<http://ent.sina.com.cn/v/m/2005-12-05/1744918136.html> [2006.6.1]
- 114) トプギェルは1958年，チベット自治区シガツェの生まれ。1976年，炭鉱労働に従事していた時，思いがけず自治区の話劇団に見いだされ

た。選考基準の一つに毛沢東詩詞の朗唱が含まれており、自治区から選ばれた最後の「工農兵俳優」の一人であった。その後、上海戯劇学院チベット班に入学し演技と漢語を習得した後、自治区話劇団に配属された。その後、チベットを題材にしたテレビドラマ「雪震」「拉薩往事」「西藏風雲」等で頭角を現し、映画「紅河谷」を経て、「可可西里」で彼の名前は一躍有名になった。

「藏族演員多布杰：從挖煤工人到表演藝術家」
(2005.10.30)

http://info.tibet.cn/news/rwxw/ysrw/t20051030_65982.htm [2006.7.20]

- 115) 詳細は川田進「電視劇『格達活仏』に見る虚々実々の英雄像 - - 白利寺ゲダ五世の死と再生」(『火鍋子』68号, 2006年10月, 翠書房)を参照のこと。
- 116) 賈慶林「在西藏自治区成立四十周年慶祝大会上的講話」『西藏日報』2005年9月2日。
- 117) 「20集歷史題材電視《格達活仏》震撼人心」(2005.11.30)
<http://ent.sina.com.cn/v/m/p/2005-11-30/0945912509.html>
[2006.6.1]
- 118) 「列確等審看電視連續劇《格達活仏》」『西藏日報』2005年9月8日
- 119) 「專家熱批《格達活仏》：史詩巨制震撼人心」(2005.12.5)
<http://ent.sina.com.cn/v/m/2005-12-05/1738918134.html>
[2006.6.1]
- 120) 「藏族演員多布杰：從挖煤工人到表演藝術家」(2005.10.30)
http://info.tibet.cn/news/rwxw/ysrw/t20051030_65982.htm [2006.7.20]
- 121) VCD 『西藏風雲』中国国際電視總公司, 1999年。
- 122) 「四川省深入開展“向第五世格達活仏學習, 爭做愛國愛教好僧尼”活動」

<http://www.zyztz.org.cn/dfxx/sichuan/tzdt/80200502250274.htm> [2006.6.1]

- 123) 「甘孜県深入開展“向第五世格達活仏學習”活動」

<http://www.zyztz.org.cn/dfxx/sichuan/tzdt/80200502250274.htm> [2006.6.1]

- 124) 『中国西藏』2004年第2期, 2 - 3頁。

【図版】

- 1) 「中国紅軍總政治部甘孜喇嘛寺白利喇嘛寺互助條約」(1936年4月12日)。朱德總司令和格達五世紀念館の展示パネルを川田が撮影(2003年8月)。
- 2) 朱德總司令和格達五世紀念館の展示パネルを川田が撮影(2003年8月)。
- 3) 『西藏50年歷史卷』民族出版社, 2001年。
- 4) 『達賴喇嘛和西藏』新大陸出版社有限公司, 2006年, 105頁。
- 5) 朱德總司令和格達五世紀念館にて川田が撮影(2003年8月)。
- 6) 朱德總司令和格達五世紀念館にて川田が撮影(2003年8月)。
- 7) 朱德總司令和格達五世紀念館にて川田が撮影(2003年8月)。
- 8) ゲダ6世宅(四川省甘孜県)にて川田が撮影(2005年8月)。
- 9) 『中国西藏』2000年第4期, 『中国西藏』雜誌社, 38頁。
- 10) DVD 『格達活仏』北京電視藝術中心音像出版社, 2005年11月。